



完全攻略D

フルカラー
同人誌版

成人向
コミック



から
ない
よう
だな
うう……



マヒ薬……？



ゼシカ編 「屈辱の女魔道士」



サザンビークで魔法の鏡をもらうためにチャゴス王子の護衛をすることになったゼシカたち。依頼は王子とともに王家の山に行き、アルゴンリザードを倒すという内容だった。わがまま王子の護衛という気がすすまない内容であったが魔法の鏡がないと旅が先に進めない。サザンビーク王家の用意した馬車に乗り込み道を急いだ。

ヒヒーン！！

馬がいなくて足を止めた。

興奮して鼻を鳴らしている——魔物のお出まじだった。皆それぞれ、武器をとって馬車の外へと飛び出していくが——。ぐいっ！

「うわ、ちよ、ちよつと何よ！？」

「待て！ おまえはほくを護衛するために残ってもらおうぞ！」

「はあ？」

呆れてため息をつくゼシカ。

他の三人は苦笑しながらも次々と外に出ていき、馬車のなかにはゼシカと王子だけが残された。ゼシカの服のすそは王子がしっかりと掴んでいる。

「ほくを護衛するのもおまえらの仕事だろう！」

「……んもう！」

ただ幸いにして魔物の数は手に負えないほどでもないようだ。

ゼシカ一人が抜けてもなんとかなるだろう。

逆に言えば、他の三人がこの手間にかかる王子の相手をゼシカに任せたということでもある。

「しょうがないわね……」

不満げに鼻を鳴らしながらもゼシカは武器を置いた。

「さあ、ほくの横に腰かけたまえ」

「つとに、世話のかかる王子ね。別に隣に座らなくても……あれ、つとにつっけんどんに言うゼシカだったが、急にバランスを崩す。脚をもつれさせてふらふらと立ち往生している。

「え……？ な、なに……？」

ふふふ。この時を待っていたんだ！」

王子は急にゼシカを抱き寄せた。

無駄さ
マヒ薬が
効いているからね

ちようどいい
タイミングで
モンスターが
来てくれたよ

な……
どうして……!?!?
力が入らない……!

マヒ薬……?!

そう!
我が王家に伝わる
ひみつの薬だ!

お前が飲んでいた
水に入れて
おいたんだ!

ぼくの力を
思い知ったか!

モ

モ

「きゃー! 何するの!?!」

王子は後ろから、ゼシカの胸を思い切り掴む。

「おほっ! この感触……! 思っていたとおりだ!」

「や、やめなさい! こ、この……!」

頬を真っ赤に紅潮させて身をよじるゼシカだが、

何故か身体が思うように動かない。

思い切り力をこめてもじんじんとした痺れを返してくるだけだった。

(な……どうして……!?!力が入らない……!)

焦るゼシカの視界の下で王子の手が豊満な胸を堪能している。

やや乱暴に指を蠢かせ、弾力を存分に味わっていた。

「ん……ちよ、や、やめなさい……!」

「くふふ……どうだ、動けまい」

ゼシカが抵抗できないことをいいことに

王子は余裕たつぷりに笑った。

執拗で粘着質なてつきで胸を何度も何度もみしだく。

「こ……のお……!」

懸命に力を入れていいのか、ゼシカの額にうっすらと汗が浮かぶ。

だが相変わらず身体はほとんど動かない。

「無駄さ。マヒ薬が効いているからね。」

ちようどいいタイミングでモンスターが来てくれたよ」

「マヒ薬……?」

「そう! 我が王家に伝わるひみつの薬だ!」

「お前が飲んでいた水に入れておいたんだ!」

ぼくの力を思い知ったか!」

高らかに笑い、王子はゼシカの首筋に舌を這わせた。

「ひゃん!」

ぬるぬるとした生暖かい感触。

身体が痺れているせいか王子が与えてくる刺激を

妙なほど生々しく感じてしまう。



「そんな胸を強調するような服を着ていたおまえが悪いんだぞ。おまえはほくのおもちやになれ！」

勝手なことを言いながら王子はゼシカの服をずり下げる。

「い、いや……！」

ゼシカの形のいい胸があらわになった。

「おお、吸い付くようだ！」

王子は早速両の乳房にびったりと手の平を張り付かせて感触を楽しんでいる。

うっすらと汗をかいているせいもあって、

柔肌が吸い付くかのようにだった。

人差し指を伸ばし、ゼシカの胸の先端をもてあそぶ。

「う……くっ……！」

ゼシカの身体はまだほとんど反応しておらず、

乳首もまだ柔らかいままだった。

だが王子が執拗にそこを突き、こねることで徐々に芯ができてくる。

「ふっふっふ。なんだ、この反応は？」

王子は得意げに鼻を鳴らす。

「ふふん！ ここが気持ちいいのか！？」

「んあ、や、痛……ッ！」

調子に乗って乳首をつまみあげるが、

そんな乱暴な愛撫が心地良いわけがない。

ゼシカは痛みに眉をひそめぎゅっと目を閉じた。

王子はゼシカのそんな仕草にも興奮してしまう。

「このっ、このっ！ どうだ！？」

「やつ、だめ、痛……痛い、つてばあ！」

ひねり、こねり、ピンと指先で弾く。

ゼシカ感覚はもともと鋭敏で、それだけに乱暴な愛撫には

快感よりも痛みのほうが大きかった。

だが王子のほうもゼシカを喜ばせるよりも

自分の好きなように身体を弄びたいという欲望が大きい。

ゼシカが声をあげたり抗議したりしても、逆にそれに興奮したかのように愛撫を続ける。

仲間がこのパーティに
おまえを
置いてくれているのは
そのカラダのおかげに
違いない

非力な女が
まともに戦えるか!

違う!
違うわ!

私はみんなのことを
信頼してるし
みんなだって……

ああッ!!

どうした?
本当のことを
言ってみろ

冗談を言うな!
その証拠に
ここは濡れそぼってるじゃ
ないか!

暇があったら
仲間の男に
されてるんだらう?

(うう……みんな、早く戻ってきてよ……!)

外はまだ騒がしく、仲間の掛け声や武器を振るう音が聞こえてくる。

戦闘はまだまだ終わりそうになかった。

「フン。どうせお前なんか戦ってもたいしたことないんだろ?」

ゼシカが外を気にしているのに気がつき、王子が皮肉っぽく言う。

「な、なにを! そんなことないわ!」

「こんな服を着て、こんなカラダをしていちゃまともに戦えないだらう!」

「こ、これは……動きやすいし、お気に入りだから……」

「フン、こんな服がお気に入りだなんて、男を誘っていると思えないな!」

王子は勝ち誇って言いながらゼシカの股間へと指を伸ばす。

「んあ、いや、いやあ……っ!」

ゼシカの秘所はまだほとんど濡れていない。

ほんの少し湿っているだけだ。

「冗談を言うな! その証拠にここは濡れそぼってるじゃないか!」

だが、王子は嘘をついてゼシカを追い込む。

「そ、そんな……!」

「どうした? 本当のことを言ってみろ。」

暇があったら、仲間の男にされてるんだらう?」

「ううう……ちがう、ちがうう……!」

王子の辛らつな言葉にゼシカはふるふるとかぶりを振った。

こんな世間知らずの王子に何がわかるんだという憤りがある。

今すぐ張り倒してやりたい。

「く……うう、あ……う、くうう……!」

けれどマヒ薬の効果は強力だった。



(いくら王子だっていっても、ゆるさない……！)
せめてもの抵抗にニヤニヤと笑いながらのぞきこんでくる顔を睨む。
「ふ、ふん。そう怖い顔をするな。これで喜ばせてやるからな」
自らの懐をまさぐり、何かを取り出した。

「な、なに、これ……!?」
気味の悪いなまあたかさが股間に押し当てられる。

「これも我が王家に伝わる秘宝のひとつ、“振動石”さ！」

王子が手にしているのは特殊な石でできた張り型だった。
魔法がこめられていて、使用者の意思によって

まるで生き物ののようにうねり、振動する。

「それ、どうだ！」

「え……あ、ああっ！」

ヴヴヴヴ……

小さくやや甲高い音を立てながら張り型が振動し始める。

「ん……く、んんっ……！」

(なに、何なのこれ……!?)

王子の指では正直あまり感じなかったけれど――

この張り型は違っていた。

王子が適当に股間に押し当てているだけなのに、

性感がどんどんわきあがってくる。

「あふっ……うう、は、はあ……っ！」

もともと敏感なゼシカにとって

王子の指は不器用で力が入りすぎていた。

この張り型のような微弱な振動こそが

ゼシカの肉体にはぴったりとほまる。

「この淫乱！ いきなりこんなにも乱れ始めるとはな！」

「ち、ちが……私、そんなんじゃ……あああ！」

王子の微妙に的の外れた手つきで、

偶然にもクリトリスの周囲が優しく刺激されている。

包皮の上から微弱な振動が伝わってくるのが丁度よく心地良い。

(ダメ……こんな、感じすぎて……!)

身体だけでなく頭の中までマヒしてしまいそうだった。



「……この辺りがいいのか？」
張り型の先がゼシカのクリトリスの包皮を剥いた。
肉芽に直接振動が伝わる。

「ああっ！ あ——はっ、ああっ、はああああん！」
「お、おお……！ ここか！ ここがいいのか！」

ゼシカの反応に手こたえを感じて王子の気分も盛り上がる。
張り型をゆるゆると繰り返しながら、
空いた手でゼシカの秘所を愛撫し始めた。

「んふ……ああ、はあ……ああっ、はあ、やあん！」
指を少し入れただけでゼシカは激烈な反応を返す。
膣は激しく収縮し、王子の指を食い締めた。

「おほ——！ ここ、これはいい！」
とつさに肉棒を入れたときのことを想像して王子は鼻の下を伸ばす。
更に膣内の感触を確かめるために指を突き入れた。

「んんんうっ！」
指先が偶然、ゼシカの膣内の弱点をひっかく。
「ん？ なんだ？ ここがいいのか？」

更に締め付けが強くなったのを感じ、
王子は指を折り曲げて膣壁をひっかいた。

「あ——か、はっ、やあああああ！」
ゼシカがアゴをあげて全身をびくびくと震わせる。
振動石も断続的にクリトリスに当たっていて、
ゼシカの性感を高め続けている。

（や——だめ、何か、何か来る——！ 頭のなか、白く——）
「いやあ、こ、こんな……や、ああっ、はっ、あ——」
むしろ王子の拙さがじれったいような感覚をもたらして
絶頂の高みを大きなものにする。

「あ、ああ、ああ、あ、あああああああああ！」
激しく全身を震わせながらゼシカは大きなオルガスムスに達した。



達したゼシカがぐったりとしている間に王子は一計を案じる。

「んん……あう……っ」

まだヒクついているゼシカの秘所に張り型をあてがった。少し細身なそれを少しづつ腔内へと侵入させていき——ある程度入ったところで下着でフタをする。

「う……あ……？」

「そら、おまえの好きなものをぶちこんでやったぞ！」

「あ……あ、はあ、あううう……！」

ヴヴヴヴヴ……！

くぐもった音が鳴り、

ゼシカの胎内で張り型が振動を始めたのがわかった。

「うあ……はあ、やあああ……！」

快感の余韻が引ききつていないところに

この刺激はあまりにも酷だった。

引きかけていた性感の波が一気にぶり返ってきて

全身の表面にびりびりとした電流が走る。

「い、や、あ……は、うう……く……！」

「フン。そんなに良いのか、この変態め！」

「あ……うう、あう……はああ！」

四肢をピンと突っ張り、何かに耐えるようにする。

だがそこで——。

戦いの後始末には
まだ時間がかかるはずだし
みんなが戻ってくるまでに
もう一回イカせてやろうかな？

んんッ!!

んんッ!!

どうしよう……
みんなに
こんな姿を……!

ダメ……頭の中
ぐちゃぐちゃで……
…なにも考えられない
白い……また白いのが
キチャウ……!!

馬車の外で仲間の歓声。
しばらくすると同時に薬草を取り出す音や、
回復呪文の詠唱が聞こえ始める。
「おつと戦闘が終わったか。」
もつと遊んでやりたかったけどここまでだな」
(み、みんな……!)

ゼシカの胸中に相反する感情が巻き起こる。
今すぐ助けて欲しいという想いと、
こんな情けないところを見られたくないという想い。
(どうすれば……)

そんなゼシカの動揺に乗じて、王子がまた愛撫を始める。
「え……ちよ、いや、やめて……!」

「戦いの後始末にはまだ時間がかかるはずだし、
みんなが戻ってくるまでもう一回イカせてやろうかな？」
言いながら強い力で胸をもみしだく。

「はうう……うう、や、いやあ、ああっ……!」

王子の愛撫は相変わらず拙い。
けれどゼシカの身体は十分に高まっているし、
何より腔内ではずっと張り型が振動している。

「うう……く、あ、はあ、ああ、あああうう……っ」
(どうしよう……みんなが、こんな姿を……!)

今にも仲間が馬車の中に帰ってくるかもしれないという
焦りと混乱、そして羞恥——。

それらもゼシカの快楽を引き出す要素になっていた。

は あああ
あはっ…やッあああつ
いやあ！ だめっ…

あ—あああああつ
ううううううう！

(ダメ……頭の中、ぐちゃぐちゃで……
なにも考えられない……
白い……また白いのが、キチャウ……！)
「おお？ イクのか？ イクのか！？」
興奮した王子が身体を揺らし、
その衝撃がダイレクトに張り型に伝わる。
「は、あああ—あ、はっ、や、あああつ、
いやあ！ だめ、あ—あああああつ、うううううう！」
二度目の絶頂がゼシカを襲った。

(だ、大丈夫……だよね?)

バレてない……よね?)

仲間に笑顔に向けながらゼシカだったが、内心では探りを入れている。

皆戦闘で疲れていることもあって

馬車内に特別な注意を払うものはいない。

「……………」

王子もすました顔でふんぞり返っていた。

(もう、最低……!)

皆に気付かれぬように

王子を睨むが素知らぬ顔。

(みんなに言うわけにはいかないわ……)

こんな情けない奴に

いいように弄ばれたなんて!

もし次の戦闘が始まったら、

今度は王子に仕返ししてやろう。

そんなことを考えつつ機会をうかがう……

だが——

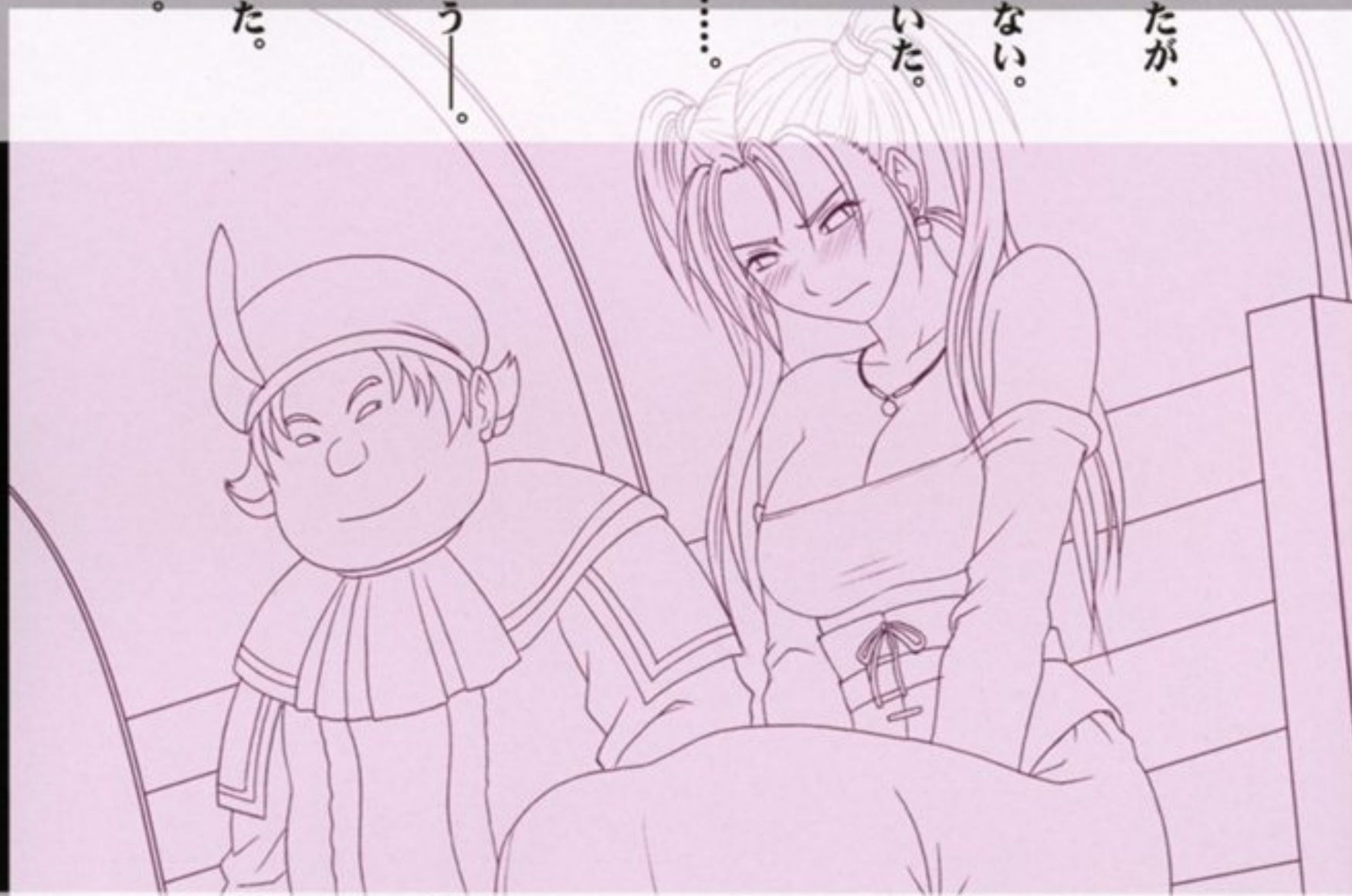
ヴヴヴヴヴヴ……

「ひんっ!?!」

止まっていた張り型が急に動き出した。

「あ……う、ふう、う——」

なんとか息を整えて、刺激に耐える。



(もう! いったい何考えてるのよ!?)

皆がいる前でこれを動かされるとは思っていなかった。

「うう……はあ、は……う」

手をぎゅつとにぎり耐えていると

次第に身体が火照ってきた。

「ゼシカ、大丈夫か? 顔が赤いぞ?」

「へ!?! う、ううん——なんでも、ん、ないわ」

必死に笑顔を作って返す。

声もうわずっていて明らかに様子がおかしかったが、

本人がそう言うのならと引き下がった。

(ほんつとに信じられない! このヘンタイ王子!)

きつと睨むゼシカだったが——

「ふあ!?!」

——王子が振動を強くすると

つい素っ頓狂な声をあげてしまっていた。

「う……うう……」

ヴヴヴヴヴヴ!

馬車の音がなければとつくに

気付かれてしまっていただろう。

さらに——

(こ、この振動、が……!)

馬車が進む音に救われているのは事実だが、

馬車が進む振動に追い詰められてもいた。

荒い道でことごとと揺れるたび、

股間に差し込まれた張り型がぐいぐいと動く。

(だ、め……このまま、だと……)

またゼシカの脳裏にちかちかと白い光が灯り始める。



やめっ……て！
このお……！！

ふふふ
ムダムダ
大人しくするんだ……

どうせお前も
またボクに
されるのを
待ってたんだらう？

ガクン——！！

いきなり馬がいなないて馬車が大きく揺れた。

「マドハンドだ！」

誰ともなく声をあげ、皆馬車の外に飛び出していく。

「な、何よ……！！」

「また二人きりになったな」

王子は嘲笑いながらゼシカの胸に手を伸ばした。

「やめっ……て、このお……！！」

今度は正面から王子が胸にむしゃぶりついてくる。

生理的な嫌悪が全身に走り、必死に押しつけようとする。

だがやはり身体は自由に動かなかった。

「ふふふ。ムダムダ、大人しくするんだ！」

「うう……、や、やあ！」

王子のでっぷりとした唇に乳首が包まれておもいきり吸い上げられる。

ヴヴヴヴヴ……

胸への愛撫と張り型の振動。

また二箇所同時に刺激を与えられることになり、

ゼシカはみるみる追い詰められていく。

「素直じゃない娘にはおしおきだ！」

王子がゼシカを組み敷いていることに

陶酔を覚えているのは明らかだった。

幼児的な万能感をむき出しにしてゼシカを責める。

思い切り強く乳首に吸い付く。

「うう……い、うあ……や、あああっ！」

そのうちにゼシカの反応は痛いだけのものでもなくなっていた。

張り型の振動によって常に快感が生み出されるせいで

痛みと快楽が混ざっていく。

「はっ、ああ、あふ……うう、

ママのおっぱいがそんなに、恋しいの？ さ、最低ね……！！」

「な、なにを！」

“ママ”という言葉がよほどひっかかったのだろうか。

王子は顔を真っ赤にした。

おまえは
ほくのおもちやだ!
おもちやなんだ!

そのくせに
生意気な口を
きくな!

お前の
いやらしいカラダは
ボクの思い通り
なんだぞ

ほらいケよ!
ほら!

ダメ……
このままじゃ
ほんとに……
イツちゃう!

「おもちやのくせに生意気な口をきくな!」

「もごっ、う、ううう!」

ゼシカの唇が潰れてしまいそうなくらい強く口を塞ぐ。

「フン、これでいい!」

そう言つて、王子は再びゼシカの胸をしゃぶり始める。

「ふう……この胸だけは本当に最高だな」

王子はゼシカの胸でやりたい放題に遊んでいる。

「お前のいやらしいカラダはボクの思い通りなんだぞ!

ほらいケよ! ほら!

「んう!?!」

ヴヴヴヴヴ!

王子の言葉と共に張り型の振動が強くなった。

王子は更にクリトリスに指を伸ばし、乳房を口にくわえる。

「んん! うぐ……うう……んふんうっ!」

(ダメ……このままじゃ、ほんとに……イツちゃう!)

「イケ、イってしまえ! ほくの……ほくの手で!」

王子がクリトリスを強く押した。

膣壁ごしに、張り型の振動がクリトリスに伝わってしまう――。

「ん、んん……ん、んふんう、んんー……ツツ!」

ゼシカの四肢がびくびくと震える。

三度目の絶頂。

(そ、そんな……)

「ハッハッハ! どうだ、ほくのテクニクは!」

「うう……ん、ひぐ……う、うう……っ」

王子の手で本当にイカされてしまったという事実が何よりの屈辱だった。

(どうして……こんなやつに……! もう、いやあ……)

満足気に鼻の穴を膨らませつつ、王子は外の様子をうかがった。

マドハンドはさつきから全く数が減っていない。

いや、数は減っているが恐らく次々と仲間を呼んでいる状態なのだろう。

「まだまだ時間はありそうだな……」

つぶやいて、スポンを下ろす。

(え……そんな、まさか……!)

どうだ
気持ちいいか？

王子のボクが
入れてやっっているんだ
ありがたく思えよ
ヘンタイ女

んっ……

んっ……

何が王子よ……！
こんな卑怯なことして
無理矢理犯して……！

んっ……
んっ……
んっ……

王子はゼシカの股間に自らのペニスをあてがった。
「んん、んんうーっ！」

ゼシカの抗議をよそにゆっくりと腰を進めていく。
にゅぶ、ず、ずぬぬ——。

三度も達して十分にほぐれていたゼシカのそこは
ほとんど抵抗なく王子を受け容れてしまう。

「もうすぐで、全部入るぞ！」
ぶるつと身体を震わせる王子。

それだけゼシカの膣壁の感触が心地いい。
「ん、うう……くくふ、う……ん……」

ゼシカのほうも嫌悪感と屈辱感の裏に
たぎるような熱を感じてしまっていた。

マヒの無力さのなかで、自分の胎内に侵入してきた
肉棒の形がはつきりと理解できる。

もうほとんど抵抗を諦めかけていたが——。
「王子のボクが入れてやっっているんだ ありがたく思えよヘンタイ女」
「んんう！」

——王子のその一言がきっかけて情けなさど怒りがわいてくる。
（何が王子よ……！ こんな卑怯なことして、無理矢理犯して……！）

なけなしの力を振り絞ってゼシカは必死に逃げようとする。
ニヤニヤ笑いながら言う王子を睨み、太った腹を押しつけようとする。

だが脂肪をぶよぶよと震わせるだけで
身体を動かすことなどできそうになかった。


「んふ……はふ、ん、ふう……！」
しかもそうやってなんとか抵抗しているうちに、

だんだんと膣内のペニスが大きくなっていくように感じる。
嫌悪からゼシカの膣肉が締まったことと、

無駄な抵抗に王子が随喜を感じたことの相乗効果だった。
「んっ……く、んむ……んんっ！」

（どうして……また、白いのが……。いやッ！）
挿入の感触に慣れてきた自分の身体がたまたま嫌で、

ゼシカは更に激しく抵抗する。



「そろそろおイタはやめにしてもらおうか」
王子は余裕たつぷりに言っつてゼシカの腕を拘束した。
「ん、んうー！」

それでもめげずに、とにかく挿入の感覚から逃げるために上へ上へと逃げる。
しかし、ここは馬車の中。ほどなくして頭が壁にぶつかり追い詰められる。

「フフフ……もう終わりかな？」

言いながら、改めてゆっくりと奥深くへと挿入していく。

「んう……あ、あうう……！」

ずっしりとした肉体の重量感を感じるだけで絶望的な気分になる。

もう逃げられない——そう思ってしまったことが、ゼシカを精神的に追い詰めた。

「ふむ。そうだな。おまえにはこれをやろう」

王子は喜色満面でかちやかちやと鳴るものを手にした。

（な、なに……？）

これ以上まだ何をするのか——そう怯えと戸惑いを感じるゼシカの眼前に、
皮製のバンドのようなものが示される。

「首輪だ」

嬉しそうに笑いながらゼシカにそれを装着する。

（いや……！）

少しひやりとした皮の感触が首にあたってきゅつと締まる。

やや苦しいくらいに強さでゼシカは首輪をつけられてしまった。

「ふ、ふふ、はははは！ 可愛くなったじゃないか！」

ゼシカが顔を背けようとする王子は首輪についたリードを強く引く。

「こちら！ ちゃんとご主人様のほうを見ろ！」

「はう……うう、く、うう……」

もう完全にゼシカの逃げ場はなくなっていた。

壁際においつめられ、のしかかられ、首輪をはめられて王子の思うがまま。

（もう……どうすることも……）

無意識のうちに視界が滲む。

「これでお前は完全にボクのおモチャだな」

ゼシカが目尻に涙をためているのを見て王子は激しく興奮し始めた。首輪をつけたこともあって改めて性的な欲求が湧き上がり、陰茎がひとまわり大きくなる。

「ではそろそろ本番といこうか」

「ずぬ——ばん、ばん、ばん！」

「ふは、ああ、んっ！ んんっ！」

王子が腰を動かし始め、ゼシカの嬌声とも泣き声ともとれない切なげな声があがる——。

王子はリードから手を離さず気ままにゼシカの首を操る。

息苦しいのを知っていて強く振ったり、左右に大きく傾かせたりした。

（あたま、ゆれて——）

ただでさえ酸欠に近い状態になっているのに脳が揺れてますます意識が朦朧とする。

しかし、そんな状態でも、いやそんな状態だからこそか——挿入されているものをより一層強く感じていた。

「んんっ、ふあ、や、ああ……うう、うぐ、くひ……うううんんっ！」

「どうだ、いいんだらう、このヘンタイ女！」

「んはっ、はあ……ん、んぐ、くあ……んんっ！」

「こんなに締めて……いったいどれだけ感じてるんだ、ええ？」

王子が奥をつくたびに確かにゼシカの膣はきゅつと引き絞るようにして締まる。

ほぐれた褌が心地良く吸い付き、肉茎をやわらかく受け止めていた。

「ああ……いあ、あ、ふ……うう、うううう！」

敏感なゼシカの青い性。それが張り型とペニス両方の長い時間にわたる挿入によって急速に開発されている。

「お前なかないいな。この旅が終わったあとボクが飼ってやろうか？」

王子のセリフももうほとんど耳に入っていない。

（なかが、なかがこすれて……どうしてこんなにきもちいいの……！？）

首輪をはめられたことでどこか素直になった部分があったのか。

ゼシカは自分のなかにある快楽と心地良い刺激を受け容れ始めている。

「はう……ひん！ うう、くは……はあ、い、いい……」

「はあ、はあ、はあ。くう、最高だ……！」

二人の腰の動きがいつしか合う。

ゼシカの動きはほんのわずかなものだったが、それでも王子のものがもつと奥に入るような形に本能的に誘導していた。

「ああ、うう、ふあ、ああ、いい、きもち、いい……！」

こんな情けない男に犯されている——。

「おおぅ……こ、このうねり……、そろそろイクぞ、ヘンタイ女……！」
「はあ、ああ、く、うう……んっ、うあ、んうう！」

王子のピストンが一気に速くなる。
「ばちゅ、ちゅ、じゅぶ、ぶちゅ——！」

「さあ、最後はイキ顔をほくに見せてみる！」
リードを引っ張られ顔と顔が近付く。

「ああ、ん、ふあ……ん——」

ゼシカの表情は苦しく切なげだったが、においたつような淫蕩さを感じさせるものでもあった。

「く……、で、出るぞっ……！」

びゅ、びゆる、びゆく、ぶぶっ！

「あ、ああ——」

腔内射精の瞬間、ゼシカの表情が甘くとろけた。

「はひっ、い、イ……うううううううッッ……！」

その表情はすぐに元の切なげなものにとってかわる。だが、王子にはゼシカが悦びを感じているのが確かにわかった。それは青い果実が熟れていく瞬間。

「お、おお、まだ……出るっ！」

どぶ、どぐ、びゅ——。

王子の性感にも火がつき、射精が長く長く続く。

「ひうっ、はあ、は、ああっ！ うく……ああ、んんううううっ！ つうっ！」

精液の圧力でペニスが押し出されそうになるくらいの射精量。

（ああ……なか、いっぱい……）

べとべとの汚液が腔壁になじんでいく感触を味わいながらゼシカは気を失った……。

はひッ……

……！

マーニャ編 「スリル」



「ふーん、こんなのが勇者ねえ〜？」

初対面の“勇者”ソロをマーニャはまじまじと眺めた。上から下まで全身をくまなく見てから、顔に顔を近づける。

「ふーん……」

二度目のため息まじりの声は、

けして「気に入った」という性格のものではなかった。

「ちよつと失礼ですよ、姉さん」

「んん？ かまやしないわよ」

マーニャとは対照的にミネアは視線を下に落としている。

ソロにうまく話しかけることもできないようだった。

「うーん。悪くはないんだけど、なーんか地味なのよねー……」

勝手なことを言いながら

マーニャはまたぶしつけな視線でソロを眺めている。

対する勇者ソロのほうは、どこか遠くを見るような

泰然自若とした態度でマーニャの視線を受け流していた。

それに何故かカチンときて、マーニャは口を開く。

「……ていうか、童貞っぼい？」

「ね、姉さん……！ 何言ってるんですか！」

「えー？ 見たままを言ったただけだけど？」

ねえ、その辺どうなの、勇者さん？」

顔を真っ赤にして姉を諷めるミネアと、挑発的な態度でからかうマーニャ。

ソロはやはり遠くを見るようなぼうっとした目で静かに見ている。

「何とか言ったらどうなの？ 童貞じゃないっていうんなら、

今晚にでも襲ってきて行動で示してくれてもいいんだけどお？」

「……」

そこまで言われても勇者ソロは落ち着いていた。

静かに目を閉じつつ「よろしく」と一言だけ言う。

「あ……よ、よろしくお願ひしますっ」

それにあわててミネアが答えるが、マーニャは肩をすくめただけ。

「フン、何よ朴念仁。つまんなーい」

そんな憎まれ口にも全く興味を示した風なく、

ソロは旅のための身支度を整えている。

乱暴な音と共に部屋の扉が開く。

「んあー……もう！ 負けたまーけたまたまけちゃったー！ ……ヒック」
入ってきたのははしたたかに酔っ払っているマーニヤだった。

もう時刻は遅く、同室のミネアはとつくに眠りについている。

「あんのインチキディーラー……。今度あつたら、ただじゃおかな……。ううういい」
だが全く遠慮した風もなくドタドタと部屋を歩いて思い切りベッドに倒れこむ。

ミネアも慣れたものでそんな物音や声ぐらいでは全く起きるそぶりを見せなかった。

「ふああ……。もうこんなの、飲まなきゃやっつけられないっていうのお……」

酒臭い息をぶんぶんと漂わせ、クダを巻きながらもマーニヤは目を閉じる。

遅くまで遊び歩いた疲れと酔いのせいで、ベッドに寝転がるとすぐに眠気がやってきた。

「うう……。ん……。ふあ……。ふう……」

だが――。

ベッドに人影が差し、マーニヤを覆った。

「んう……。？」

薄ぼんやりと目を開けるとそこにはソロの姿。

「え――」

有無を言わずにソロは覆いかぶさってきて、マーニヤを後ろから抱きすくめる。

やめなさ……
んんっ！

いやがつている
割には
すごく濡れてるね

あれ？
すごい勢いで
溢れてきてるけど……

もしかして
こういうの
好きなの？

そ……
そんなわけ……
ふうんッ！



「ま……ま……待ってっ！ちよつと……！ダメッ！」
「どうして？ 襲ってきてもいいって言ってたでしょ？」
「マーニヤが未だ混乱しているのをいいことに、
ソロは遠慮なく股間に手を差し入れる。」

「いや……っ！ 何してるの！？」
あわてて身をよじるマーニヤだが、
酔いもあつてうまく身体に力が入らない。
（ダメ……こんな……！）

酒で体温が上昇しているところに、
ソロの身体は少しひんやりとしていて心地が良かった。
特に手首を捕まれているところが
まるで冷たい金属の手錠をさされているようで――。

「う……あ……」
更にもう一方の手の冷たい感触が太股の内側をさする。
「くう……ッ」

さわさわとしばらく感触を楽しんだ後に、
徐々に奥へ、股間へと向かっていく。

「やめなさ……んんっ！」
「いやがつている割にはすごく濡れてるね」
冷静なソロの声が耳朶に響く。

（ど……どうして、私、こんなに感じて……！？）
ククツと背中中でソロが笑ったのがわかる。
その声の冷たさにぞくぞくとした感覚を覚え、
マーニヤはわけもしらず怯えた。

「あれ？すごい勢いで溢れてきてるけど……
もしかしてこういうの好きなの？」

「そ……そんなわけ……ふうんッ」
反論をさえぎるかのように指が蠢く。
秘所の形をゆっくりとなぞられただけで愛液があふれ、
太股を伝っていった。



ソロが馬乗りになり、マーニヤを組み敷く。体重が動き、ベッドがぎしぎしと鳴った。

その音に、酔いと快楽にまみれたマーニヤの意識のどこかが明晰になる。

(音……大きくしたら、ミネア……。そう、ミネアが……！)

あわてて横を見ると、ミネアが背を向けて寝ているのが見えた。

すうすうと静かに寝息を立てているところを見ると完全に寝入っているのだろう。

だが——これ以上物音をたてるわけにはいかない。

(まずい、ミネアが目覚めて……こんなところを見られるわけには……！)

そんなマーニヤの焦りを察してソロは薄く笑った。

「なんなら、姉妹一緒にするかい？」

「な……なんですって!?!」

「おっと、そんな大声だしていいの？」

「……ッ！」

清純な妹をこんなことに巻き込むわけにはいかない——

そんな想いが強くなる。

そんなマーニヤの心を知ってか知らずか、ソロの表情は冷静なままだ。

相変わらずの、どこか遠くを見るような読めない表情で胸をもみしだく。

「く……うう……！」

男に馬乗りなられ、胸を弄ばれるのはなんともいえない屈辱だった。

ソロはそのまま顔を近づけ、マーニヤの胸の先端を口に含む。

「う……あ……ッ」

マーニヤを見上げるようにしながら舌で乳首を転がす。

(負けない……んだから……！)

強気にソロを睨むマーニヤだったが、

その頬は明らかに酔い以外のものの上気し始めている。

声を我慢すること、そしてミネアが横で寝ているという事実

徐々に追い詰められる。



胸から脇腹、腰、そして股間。

ソロのさらさらとした舌はマーニヤの肌を伝いながら段々と下がっていき、ついには秘所に達する。

「い……やあ……」

舌尖をちろちろと蛇のように動かしながら、先端でマーニヤの愛液をすくった。

「はあ、はあ、うう……！」

あまりの羞恥にマーニヤは首を振って悶えた。

だがそれでも唇をかんで声を抑えている。

——ずる、じゅるる！

それをわかっているのか、ソロは大きな音を立ててそこを吸いあげた。

「ふえ……いや、ダメ……メエ！」

じゅぞ、ずぞ、ずるるっ！

「ダメ、ダメエ……おねが、そんな音、たてたら……！」

じゅる、ぞぞ、ずぞぞっ……！

「ふあああああんっ！ は……ああ、い……ッッ！」

必死に制止するマーニヤを意に介さず、音を立てて吸い上げまくる。

ずず、じゅる、ずぞっ！

また、それはいくら音を立てて吸い上げても、

後から後から愛液があふれてきている証拠でもあった。

「い……あ、はあ……！」

マーニヤの身体が羞恥と恐れ、そして快楽にピクピクと震えている。

ソロは繋ぎ合わせた指を強く絡ませ、音をたてて膣口に吸い付いた。

じゅるる、ずず、ぶぞぞ、じゅぞ——！

「くふ、ん……う、うぐ、くう……ああ、んあ……！」

急速に性感がのぼりつめていく。

秘所からのぼってくるシンプルで強烈な悦楽。

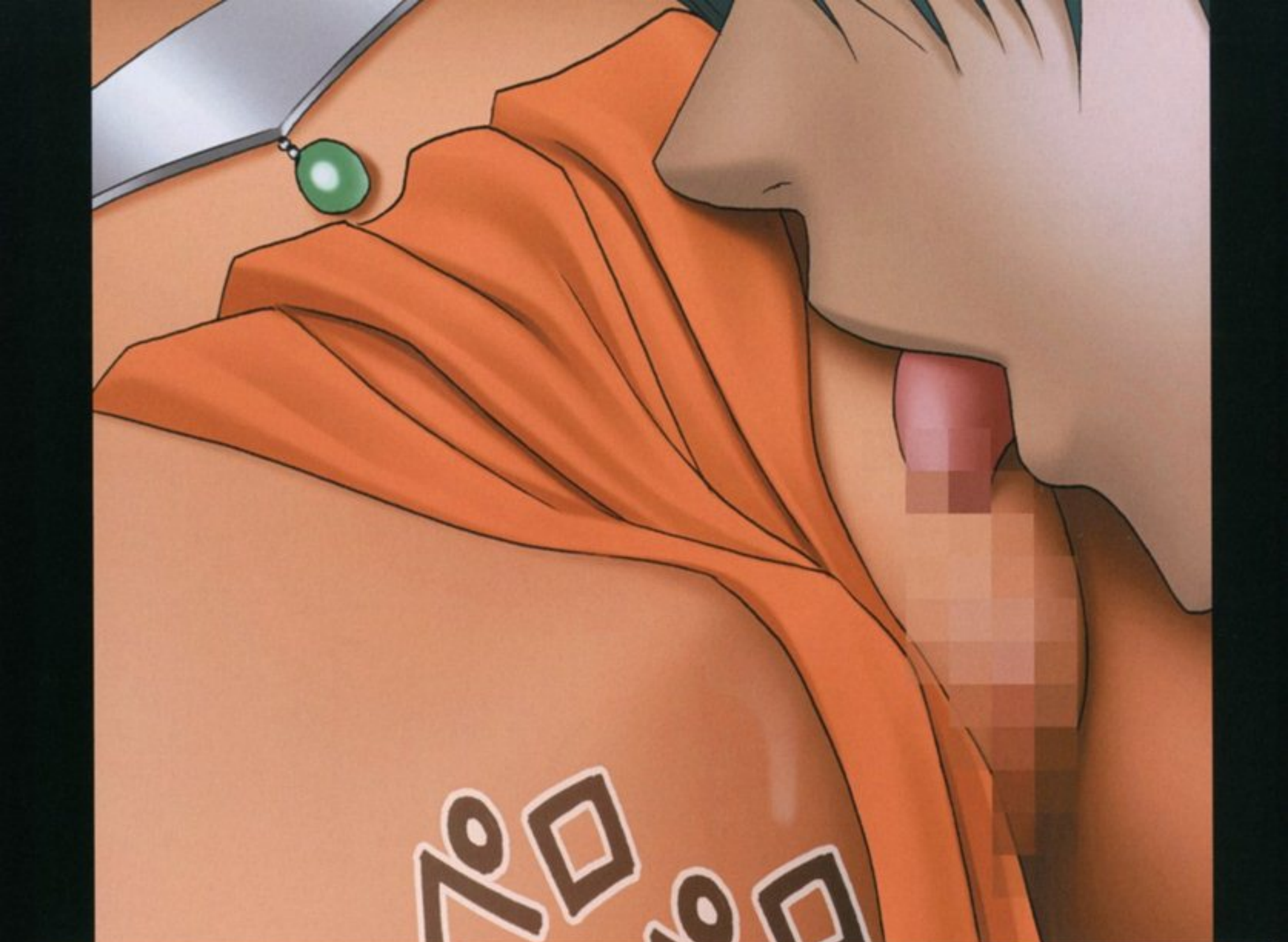
そして耳に響く音と、自分が愛液を垂れ流し続けているという事実。

絡ませた指——。

（ミネア……おねがい、おきないで……！）

じゅぞ、ずぞぞぞ、ぞぞぞぞ……！

「ぶく……んく…… あ、はあ、ううううう……！」



突き上げるような快感に全身の神経が焼かれ、頭で白い火花が散った。それはマーニヤにとって生まれて初めてのオルガスムスだった。しかしソロの責めはそこで終わらない。

マーニヤが達したことを知っていて、なお継続して愛撫する。猫が水を飲むときのように、舌でゆっくりと秘所の形をなぞる。マーニヤの陰唇は意外にも淡い色をしていて、慎ましやかに内に閉じていた。

もしほとんど経験のない男が見たとしても綺麗なその形によって今まで男を受け容れた経験がないことに気付くだろう。

今は絶頂によって少し開き、愛液を垂れ流させているものの、膣口から除く襞にもくすみひとつない。

「はうう……く、ふ……」

ソロがしばらくそこに舌を這わせていると、

絶頂から降りてきたマーニヤが再びくぐもった声をあげ始める。

「あ……う、くう……」

達してなお、高ぶりのおさまっていない自分の身体に驚きながらも、声を抑えることだけは忘れていない。

だがソロはそれをも楽しむかのように、じつくりとマーニヤの秘所を責めあげていく。

一度達したことによってマーニヤの身体は十分に敏感になっている。焦らずともまた高まっていくのは自明の理だった。

現に、膣口の近くをそろそろと舐めあげているだけで、奥からはまた愛液があふれだし、入り口は何かを求めるかのようにキュツと収縮する。

「くは……はあ、は……うう、はあ……」

マーニヤの吐息も完全に熱を帯び始めていた。

(ダメ！また何も考えられなく……！)

マーニヤの脳裏には常に白い火花がばちばちと散っている。

股間から背筋を伝わってくる電流が頭のなかで弾けるかのようにだった。

(快感が直接伝わってきちゃう……!)

舌が動き、なまあたたく湿ったものが押し付けられる。その感覚でまるで全身が包まれたようになるのだ。

舌の先端がとがり、膣口をほじられると今度は身体の奥底から快感が抉り出されるように感じる。

「あ——は、はあ、はう……う、ふう……んう……」

じわじわと与えられ続ける快感がマーニヤの戸惑いを勢い付け大きなものにしていく。

(どうして……こんなに気持ちいいの!? 男にされるのって、こんなにイイものなの……!?)
もはや嫌悪感よりも快感のほうが大きくなり始めていた。

(ああ……ま、また……おなかの奥に、熱いのが……!)

「だ……めえ……!」

ソロの頭を必死におさえ、快感をもおさえようとするマーニヤ。

だがその仕草はソロの頭をいとおしげに撫でているようにも見えた。

「あ……はあ、や……うぐ……う……はあ!」

いやいやと首を振りながら必死に耐えるが、一度達した身体はもう収まらない。

ソロの舌が動くたびに性感は高まりとめどなく愛液があふれた。

(私……こんなに、濡らして……っ!)

太股や尻をつたって滴り落ちた愛液がシーツをしとどに濡らしているのがわかる。

もういったいどれだけの愛液を流し、ソロに吸われたのかわからなかった。

「あふ……ふぐ、ん……う……ッ!」

さっきの音を立てて吸われたことを思い出す。

あれだけ下品な音を立てて吸っていたのだから、当然ソロの口の中にも愛液が入っていっただろう。

そしてあまりにも大量なそれを、ソロはきつと飲み下していたはずだった。

「う……あ……! はあ! ああ、や……ううう!」

何故かそれを思うと一気に快感が大きくなってしまふ。

(飲まれた……私、こんな男に、恥ずかしい汁を……! いや、いやあ……!)

「あう……うぐ、んふあ……! はあ、はっ、ひう……あ……ああ、んううう——!」

二度目の絶頂はあっけなく訪れた。

「はあ、はあ、ふ……はあ……う……」

そしてそれはマーニヤがソロという男を受け容れ始めたことを示していた。

らんらん
らんらん
らんらん

ダメ……!!
また何も
考えられなく……!!

どうして……
こんなに
気持ちいいの!??

快感が直接
伝わって
きちやう……!!

男にされるのって
こんなに
イイものなの……!??

あ……く……いや
あ……痛ッ……
うう……!!

ずいぶんキツイね……
まさか……

あんな挑発的な
こと言ってる
処女ってことは
ないよね？

うう……ちが……
ちがうう……

んんッ!!

はぁうらうら
うらうらうら!!

ほらほら
声ガマンしない
ミネアさんが
起きてしまうよ

二度目の絶頂の波が下がりきる前に、ソロは身体を起こす。ギンギンに隆起している若い肉杭をマーニヤの秘所へとあてがった。「え……いい、いや、だめ……!」

とっさに身をよじって抵抗しようとするマーニヤだが、絶頂の波に感覚をさらわれているせいで満足に動けない。

「う……くう、ふう……はあ……」

何度かペニスが股間を往復し、亀頭が十分に愛液で濡れた。それを潤滑剤がわりに挿入しようとするが――。

「あ、く……いや、あ……痛ッ……うう……!」
激しい抵抗感。

「ずいぶんキツイね……」

まさか、あんな挑発的なこと言ってる処女ってことはないよね？」

「うう……ちが、ちがうう……はあ、んん……!」

口ではそう言っているけど、マーニヤが処女なのはもはや明らかだった。「フッフ……」

だがソロはゆっくりとではあるが確実に肉杭を挿入していく。拒否を跳ね除け、自らをぐいぐいと押し通していく。

「あ……く、は……、うぐ、うう……!」

「ふう……」

マーニヤにとっては永遠にも思える数分の後。

ソロのペニスが全て腔内に納まった。

奥の奥まで亀頭の先端が達していて、

たくましくエラの張った雁首が膣壁を突っ張る。

(……おおきい……!)

入れられているだけで声が上がってしまいそうだった。

「動くよ……」

耳元で囁いた後、ソロはゆるゆると腰を動かし始める。

「あ……うあ……は、く……」

先ほどからソロの責めにはほとんど強引なところがない。淡々と、そしてゆっくりと愛撫しているだけだ。

しかしそれでも、マーニヤの性感は高められてしまう。

「ふあ……ああ、はあああ……ああ、くあ……!」



「初めてなのにつこう感じてみたいだね」

「う…………ち、ちが、初めてじゃ…………な、いい…………っ」

腰の動きはやはり単調で淡々としたもの。

だがそれだけに、マーニヤがペニスの形をはつきりと感じる余裕が生まれている。
(エラ…………みたいなの、が…………ひっかかって…………うう、こ、こすれてる…………!)

マーニヤの反応から、ソロは感じるどころを既にいくつか探り当てている。

だがまだそこを責めることはあえてせずに、じりじりとゆるく腰を動かし続けた。

「ああ…………ふあ、ああ、はううう…………!」

「ほらほら声ガマンしないと…………ミネアさんが起きてしまうよ」

「…………!?!」

自らの快楽に没入し始めていたマーニヤにとって、その言葉は不意打ちになりえた。

「この状況 ミネアさんが見たらどう思うんだろうね」

「…………い、いや…………! 言わない、で…………んんッ!」

マーニヤに大きく脚を開かせて、見せ付けるように挿入する。

「く…………うう…………ああ…………ッ」

ミネアという単語を出した途端にマーニヤの膣壁の反応が激しくなり始めていた。

ソロのペニスの形に答えて強くうねる。

貪欲に、男のもの形を自ら覚えこむかのようにぎゅっと包んでくる。

ソロの腰の動きがゆっくりとしてしている分、

マーニヤの身体のほうがオスを求めだしているのだ。

「ああ、はあ…………んう…………くあ、は…………!」

自ら気持ちの良いポイントを探るかのようにマーニヤの腰までもが動き始める。

「こんな腰の動き…………娼婦でもなかなかしないよ」

「ふえ…………え…………?」

「自分でわかってなかったの? ほら、見てごらんよ」

ソロはマーニヤの身体から腕を離し、腰を止める。

するとマーニヤ自身が腰をうちつけ捻っているのが明らかにわかった。

「え…………そ、そんな、私…………!」

「ミネアさんは真面目だから軽蔑されてしまうかもね」

ベッドがきしむ音はもうさほど強くはなくなっている。

あの音はマーニヤを焦らせるためという意味合いが大きかったのだろう。

「あ……はあ、ああ、ふあ……ひんっ！」

だが、今はそのぶんマーニヤ自身の喘ぎ声が大きく高くなり始めていた。

我慢しすぎたこと、そして何よりさつき焦るままソロを止めようと体力を使い過ぎたのだろう。

もう自らの声を押しとどめる気力すら疲労と甘い快樂の前に流されてしまう。

(ダメ……声、だけは……)

「うう……く、は……。あぐ、う……んう……」

時折は自分があげている声に気付き、ぐつと口をつむぐ。

だが——ソロのゆるゆるとした責めを受けるうちに精神を快樂で染められてしまう。

ソロはわざと責めを弱くする瞬間を作る。

そこで必死に我に返り、声を再び抑えようとするマーニヤに嗜虐心を煽られる。

もうほとんど無意識のうちでしか抵抗できず、

またそれによって自分で自分を追い詰めていくしかないマーニヤがどうしようもなく愛おしかった。

「ミネアさんをよほど大事にしてるんだね……」

ゆつくりと、だが力強くマーニヤの膣内を突きながら囁きかける。

「く……ふう、はう……うう……」

もうほとんど自失しながらも、それでも“ミネア”という言葉に反応してマーニヤは声を抑えた。

(ミネア……こめんね……！)

わけもわからずミネアに謝りながら、マーニヤはペニスを受け容れる。

(これ……だめ、なの……すく……きもち、よくって……いっばいになって……！)

マーニヤの胎内からはもうだいぶ青さ硬さがとれて、ソロの肉杭の形に馴染んできている。

(ああ……たまらない……。この、たくましい、エラみたいなのが……私を、外にかきだしてくみたく……！)

(それに……奥まで、突きこまれて……お腹の奥が、熱いッ……！)

今までよりもっと大きな熱い塊が下腹の奥でとぐるを巻いている。

「ああ……はあ、あうう……ふあ、ああああん！」

それがはじける瞬間を想像するだけで全身に甘やかな痺れが走る。

(ミネア……おねがい、起きないで……！)

「うう……んぐ、ふう……はあ、いう……」

快樂に染まってぐちゃぐちゃになった精神のなかで、姉さんと呼ぶミネアの声がしつとりと響く。

マーニヤの身体も精神ももう、かなり限界のところまでできている。

ソロも十分楽しんだとばかりにラストスパートへと入っていく。

すごいね…
まだ声を
ガマンできてる
なんて…

もう僕には
何回もイッてる
ところを
見られてるけど

ミネアさんには
どうしても
見られたく
ないんだね

…!!

ほあ

ミネア……
おねがい……
起きないで……!

ずちゅ、ごちゅ、ご、どちゅ——!
更に挿入の速度が早くなった。
ペニス自体もますます怒張して
最大限にまでマーニャの肉壺を押し広げる。
「はあ、あう……ふぐ、く……うう、あうう……!」
子宮口と亀頭の先端が繋がること、
一回、二回、三回、四回——。
ずぶ、じゅ、ちゅこ、ちゅこ——!



「あ——は、い、——う、あふ、んぐ、く……
うううううううう……ううううううツツ!!」

龟头がびくびくと震え、

ふくれあがりながら膣奥に突き刺さった。

下腹でとぐるを巻いていた熱が弾け

全身の神経に痺れとなって伝わる。

びゆく、どく、びゆるるる——!

「あ——んんん、ん、んぐ、ううううううツツ!!」

一番奥まで繋がった姿勢で精液が弾け、

行き場の無い白濁は狭い子宮口にもどんどん侵入していく。

(中まで……おくまで、入っ……て……!!)

全身が震えるほどの快感。

力強すぎるほどの挿入によって

まだ未熟だったマーニヤの子宮が開かれていった。

それはマーニヤが勇者ソロを1人の男として

認めた証でもあった…。

ピアンカ編「危険な遊戯」



日はとっぷりと暮れて、城の廊下はろうそくの灯に照らされている。ピアンカは今日一日の公務の疲れを癒すべく、

“二人の部屋”へと続く回廊を歩いていく。

(あのひとの顔を見ればこんな疲れなんてふきとぶわ)
倦怠感ばかりだった表情が自然とゆるんで笑顔が漏れた。やがて自室の前に着く。

扉の隙間からうつつすらと光が漏れていた。

「ただいま、あなた……」

部屋のなかには愛しい人がいるものだと思ひ声をかける。だが――。

「ッ!?!」

いきなり目を焼くような強烈な光が溢れた。

「な、なに!?!」

目の前に城の兵士らしき男が立っていて、

その腕には大きな光――いや、鏡を抱えている。

兜の下で男の口許がニヤリと歪む。

「く……!」

鏡から再び強い光があふれ、ピアンカの視界を真っ白に染めた。

(目が……!)

圧倒的な白さが去ると今度は闇が訪れる。

ピアンカの視界は完全に閉ざされてしまった。

何が目的？
そんなの
決まっているじゃ
ないですか？

この魅力的な
カラダですよ
王妃さま

やめ……
やめなさいっ！

あの人以外の
男なんて
……絶対イヤ！

モシモシ

安心してください
ひどいことは
しませんから

ただ気持ちよく
してあげる
だけですからね

闇のなかで兵士らしき男が動く気配。

目を抑えて中腰になっているピアンカの背後をとった。

素早い動作で後ろからピアンカを抱きしめて羽交い絞めにする。

「く……は、離して！」

ピアンカの声は目が見えない恐怖もあって上ずっていた。

男はそれを聞いて口許を吊り上げる。

策が成功した改心の笑みだった。

「大丈夫ですよ。目が見えなくなるのは一時的なものですから」

「……何が目的なの？」

「……」

応えずに男はピアンカの胸をわしづかみにした。

「きやー!?」

柔らかなそこは男の指を受け容れて、縦横無尽に形を変える。

「何が目的？そんなの決まっているじゃないですか？」

「この魅力的なカラダですよ 王妃さま……」

「……」

（か、カラダが目的……なの!?!）

驚きを隠せないピアンカ。

「う……くう……」

その間にも男の指は動き続けていて、

ときに胸の先端を弾くようにしながら刺激してくる。

（あの人以外の男なんて……絶対イヤ!）

胸をもみしだかれることへの不快感が一気に募る。

「やめ……やめなさいっ！」

ピアンカは大きく身じろぎし、必死で男を振り払おうとした。

「安心してください ひどいことはしませんから……」

ただ気持ちよくしてあげるだけですから」

「う……く……ッ！」

しかし背後にいる男は冷静に、
強い力でもってピアンカの動きを制する。

(この男、相当強い……！全然抵抗できない！)

それこそ一介の兵士とは思えないくらいに落ち着きふりと腕力だった。

目の見えない状態で立ち向かったとしても戦うことはおろか逃げることもすら難しいだろう。

「フフフ……どうしましたか？もう抵抗するのを諦めましたか？」

まあ目が見えないのではどうしようもないですよ

ピアンカの抵抗の気力が弱まったのを見てとって、男の腕の拘束は緩くなる。

「誰なの？ホントに誰なのあなた……あ……んっ！」

そして再びピアンカの身体を刺激し始めた。

胸とその先端を巧みに愛撫しながら股間にも手を伸ばす。

そして下着の上から軽くこねるようにゆっくりと弄ぶ。

「う、くあ……」

ピアンカは性感自体は弱くはないのだが、火が灯り始めるのは遅い傾向にあった。

まるでそれを知っているかのように微弱な愛撫を少しずつ積み重ねていく。

すりすりとして下着の上を男の指がこすっている音がする。

「うう……」

それにピアンカは徐々に反応し始めていた。

刺激の強弱よりも、“淫らなことをされている”という認識によって性感が高まっていく。

「王妃は胸だけでなくここも柔らかくていらっしやる」

相変わらずのエコーのかかった声で男は嬉しそうに言う。

ピアンカの陰唇を下着こしにもてあそびながらくりくりとこねた。

「はあ、う……はあ……」

乳首と股間をじっくりと愛撫され、ピアンカの吐息に艶が混じり始める。

首筋に男の息がかかると――

「はあん！」

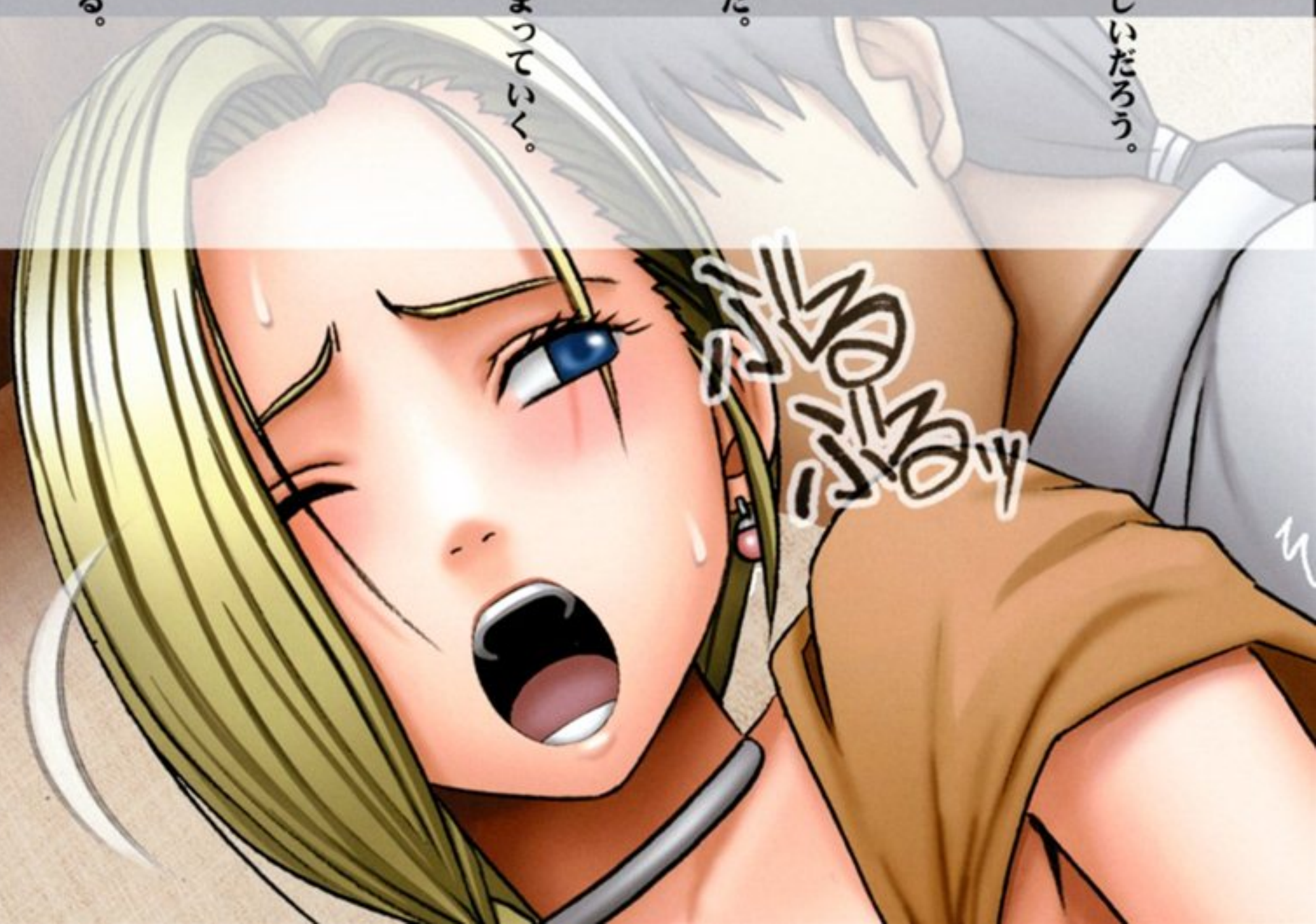
びくりと身体が大きく震えた。

(あ……濡れて……)

身体が揺れたこともあって、膣奥からあふれだした愛液が漏れていくのを感じる。

そこまで来るともうピアンカの性感の灯を消すのは難しい。

灯りにくいかわりに一度灯ればいつまでも燃えてしまう体質なのだ。



なるなるッ

いや……こんな！
あの人以外の
男に……！！

んんッ！！

無駄ですよ
王妃さま……
もう逃げられませんかよ

それに
もう王妃さまが
感じてらっしゃるのは
バレバレですよ

そろそろ
快楽を認めて
二人で
楽しみませんか？

「いや……こんな！あの人以外の男に……！はううっ！」
また大きく身をよじって逃げ出そうとするが、
男はそれをあらかじめわかっていたことのように
うまく押さえ込んだ。

「無駄ですよ、王妃さま……もう逃げられませんかよ。
それにもう王妃さまが感じてらっしゃるのは
バレバレですよ

そろそろ快楽を認めて二人でたのしみませんか？」
「く……うう……っ！」
そのまま男はピアンカと共にベッドに倒れこむ。

この男
なんでこんなに
うまいの……!?!?

まるで私のカラダを
知り尽くしている
みたい……!

王妃の
カラダのことは
よく存じ上げて
おりますよ

こうされるのも
好き
なんでしよう?

んんッ!!

はあ!!

ギニ

ギニ

横になると男は今まで以上に大胆になった。

ピアンカの胸をはだけさせ、下着をずらして乳首も秘所も直接に愛撫してくる。

「いや……やめ、やめて……っ」
くちゅー。

わずかな水音がした。

淫らに濡れ始めたピアンカの蜜壺に男は遠慮なく指を差し込んでいく。

「くあ……ああ、はあ……!」

少し乱暴なくらいの指の動き。

痛みも感じるが、その痛みも今はじんじんと疼くような快感へと変わっていった。

(まるで私のカラダを知り尽くしているみたい……!)

さつきまでのゆつくりとした丁寧な愛撫と、今の乱暴なくらいの愛撫。

それはピアンカの身体によく馴染む緩急だった。

「王妃のカラダのことは存じ上げておりますよ。

こうされるのも好きなんでしよう?」

ねっとりと絡みつくような言葉を吐きながら、男はピアンカの耳を食んだ。

「あうう……!」

ぬるぬると舌が耳を這う。

嫌悪に感じるはずのその感触は秘所への刺激と合わせて甘い切なさに変化する。

「みんなあなたのことをいやらしい目で見ていますよピアンカ王妃」

男はつぶやき、一際強く胸を揉んだ。

「痛ッ……!」

まるで嫉妬に狂ったように、

あるいはピアンカの豊満な肉体を戒めるように乳首をつねる。

「王妃……あなたはいつも無防備過ぎる……!」

言いながら男は少し落ち着いたのか、指の力が弱められる。

元のじつくりと情感を煽るような愛撫が再開された。

「どうです? 見知らぬ男に淫らなことをされる感覚は」

「く……」

ピアンカは男の問いに唇を噛んだ。嫌悪感はもちろんある。

だが、その一方で確実に性感も高まっているのだ。

嫌なはずなのに自分を知り尽くしているかのような男の指の動きに

何故か安心感を抱いてしまう。

男は背中からピアンカを包み込むように抱きしめる。

そのやり方はあくまで優しいもので、ピアンカの女心をくすぐる。

(どうして……私、こんなに無防備に……)

普段王妃として気を張っているせいか男の体温と肉体のたくましさに途方も無い心地良さを感じてしまう。

(こんな……こんな感覚……もしかしたら……)

男がすつと身体を離れた。背に感じていた体温がなくなつてピアンカは喪失感に襲われる。

「本当にかわいいですねピアンカ王妃は……人妻とは思えませんね」

ピアンカの内心の動揺を見透かして男は言う。人妻、という言葉がピアンカの胸に迫ってくる。

「あなたのことをこんな風にしたいと思つている兵士は私以外にもいるはずですよ……」

「……！　そこは……！」

問答無用で舌を伸ばしそろりと舐め上げた。

「く……ううううっ！」

途端にピアンカは激しく反応する。

男がゆっくりと下から上へ舐め上げるだけでアゴが上がり、切ない喘ぎ声が漏れ出した。

「はう……く、うう、や……め……ああ……！」

男の頭を押し返すために伸ばした手は、いつの間にか撫でるような形になってしまつている。

「ヒクヒクと騒いで……とても王妃とは思えない淫らさですね」

淡々とした口ぶりのなかにはわずかだが喜色と興奮が含まれている。

「フッフ……そんなに気持ちいいんですか？」

「ずずずずず……！」

言つて、男はピアンカの秘所に吸い付いた。陰唇全体を唇で包んで吸い上げる。

「ああ……くう、ふああああっ！」

秘所の粘膜が引きつるようにふるえ、どんどん愛液が漏れ出てくる。

それをすくうようにして器用に舌も伸ばし、膣口を刺激する。

「んん……ふう、はあ、ああ……！」

ピアンカの息の乱れが激しくなり始めている。ついには男の唇がクリトリスに到達した。

「あああ、ふあ、ああっ！」

舌でこねるように優しく包皮を剥き、小さく控えめな陰核を露出させる。

「だ、だめ……！　そこ、は……！」

「あひいん！」

男はむき出しになったクリトリスに思い切り吸い付いた。

少女のように小さかったそれが、吸われることよつて充血して可愛く隆起する。わかりますか？

「あ……ふあ、あああ、あああああっ！」

あ……あ！
あ、ああ……！
ダメ……！！

ヒクヒクと騒いで……
とても王妃とは
思えない淫らさですね

それ以上……
舌でされたら……！！

王妃のこころ
大きくなつてるのが
わかりますか？

そろそろ……
イって
もらいましようか





男の口のなかでピアンカのクリトリスは少女のものから女らしいものへと変化する。

「王妃のここ、大きくなってるのがわかりますか？」

口を離し、男は少し赤みがかったピンクの肉芽をじつくりと眺める。

「!? んあああッ!」

息を吹きかけただけでピアンカの背は激しく反った。

「そろそろ……イってもらいましょうか」

舌を出し、ピアンカに見せつけながらクリトリスへと近づけていく。

「あ……あ、あ、ああ……ダメ……それ以上……舌でされたら……!」

つん、と舌の先端がわずかに触れる。

「ん、く、あああああああああッ!」

それだけでもピアンカの反応は激烈なものだったが、

男は更にどんどん下から上へと舐め上げる。

「ああ、や、ああ……いい、いい……! あ……な、たあ! あなたあ!」

ピアンカの最後の言葉が男に火をつけた。

舌の動きは一層激しいものになり、

同時に唇全体を使ってまた陰核に吸い付く。

「んん、ふあ、ああ! だめ……あ、も、もう……!」

ピアンカの脳内で白い光が激しく散る。

身体全体が浮き上がり、下腹にじんじんと痺れるような感触――。

「い……あ、ふあ、い、くう、イ……きそ、あ、ああ、あなた……!」

イ……くうううううううううううッ!」

膣口がぎゅつと収縮し、クリトリスがびくんと大きく震えた。

「あ――は、あ――あああああああああッ!」

ピアンカの全身がかたくこわばる。

永遠にも思える一瞬の後、大きく脱力した。

「あ……くあ、は……ああ、はあッ、はあッ、はあ……!」

閉じていた膣口がだらしなく開き、後から後から愛液が漏れ出てくる。

「う……あ――、はあ……!」

ときおり痙攣する身体が絶頂の大きさを伝えるものに伝えていた。

「あ……はあ、あ、うくッ……はあ……!」

ピアンカはとろんとした眼で男を見つめる。

性感に蕩けた女の表情になっていた。

ああ……
やめてっ！
もう……！！

もう根元まで
入ってますから
あきらめたら
どうですか？

王妃の弱点は
ここでしょう？

くっくっ！！

そんなに
締め付けて……
王妃はよほど
ここが好きなのですわ

うう……ちがッ……
はあ、ひう……！！
ああっ！



ピアンカの姿態を満足気に見下ろしながら、
男は自分自身を露出させた。

濡れそぼって未だにヒクついている秘所にあてがう。

「え……？ ま、まさか……」

「ではいきますよ……」

「そ、そんな！ 待って！ それだけは——」

身を起こしかけたピアンカを力で制す。

脇腹と胸を腕でしっかとおさえつけ、男は犯す体勢に入った。

「い、いや……！」

有無を言わせず、だがゆっくりと感触を味わうように

少しずつ少しずつピアンカの膣内に侵入していく。

「あ……は、うあ……！」

「く……。いいですよ、さすが人妻のマ○コだ……！」

膣肉は激しく収縮して陰茎を拒んでいるようにも思えるが、
内に引き込むうねりも見せた。

ぎゅっと手で握っているかのように締め付けつつ、

それでも膣壁は奥へ奥へと誘っている。

挿入しながら、もう十分な硬さになっていたはずの

ペニスが更にひとまわり大きく勃起する。

「ああ……やめてっ！もう……！」

「もう根元まで入ってますから、あきらめたらどうですか？」
言って男はピアンカの子宮口を小突いた。

「あ、ひゃああん！」

途端に膣全体がぎゅつきゅつと拍を打つように縮まる。

「王妃の弱点はここでしょう？」

「うう……っ」

まるでともとも知っていたかのように一番弱いところを突いてくる男を、ピアンカはどこか遠くを見るような視線で見つめる。まだ眼は見えず、焦点は定まっていない。けれどピアンカは男を通して誰かをはつきりと見ていた。

「そんなに締め付けて……。王妃はよほどここが好きなのですね」

「うう……ちがッ……はあ、ひう……！！ ああッ！」

男はゆっくりと腰を動かして、トントンと最奥をノックする。

一定のストロークでリズムカルに突き、引き抜く際には腰を傾けてGスポットを雁首でひっかく。

ピアンカの胎内の性感帯を知り尽くしたような動き。

「あ……はっ、くう……うあ……ひゃ、あううん！」

陰茎がすっぽりと肉壺に埋まりきるたびにピアンカの甘い声が漏れた。

「どうです？ 気持ちいいでしょう？」

「く……はあ、い……やあ……」

「この反応はこんなにも正直なのに」

男は割れ目を手で押し開きわざと隙間を作る。

するとストロークのたびにジュブジュブと卑猥な音が鳴った。

「いやあ……やめてえ……こんな、こんなものって……」

「フフフ……」

男は無言を言わず、卑猥な音を鳴らし続ける。

押し開いて露出したクリトリスや陰唇をぐちゃぐちゃに愛撫しながらゆっくりと突き回した。

「ダメ……っ、このままじゃ、また……！」

ピアンカの高まりを敏感に察知し、男は胸までをも揉みしだく。

「あ……か、はあ……！ くうううんッ！ イ……くう……ううう……ッッ！」

乳首をこねられ、秘所を少し乱暴なくらいにかき回され、ピアンカは二度目の絶頂に達した。

「あ……う……？」

短い間だがピアンカは気を失っていた。

その間に男はピアンカの後ろにまわっている。

(あ……背中に体温……)

先ほどあった包まれるような安堵感がよみがえってくる。

(こんな感覚……だめなのに……)

「あひっ……うく、はあ、ああ……！」

下腹をトントンとこづかれる感覚も復活してきた。

まだ絶頂の快美が残る身体はふわふわと浮き上がりそうになる。

だが腹にしつかと回されている男の腕の感触がそれを押し留め。

(突き上げ、られてる……)

男の腰の動きはけして早くはなかったが、力強く丁寧だった。

ピアンカを服従させるかのようにならぬ乱暴さと強さが腕に込められている。

この人には、この男にはかなわない——。そんな愉悅にも似た切なさが甘く胸を締め付ける。

「んっ……はあ、んあ……ふあ！ ああ、ひう……！」

オスに屈服しているということを自覚した途端に息が詰まるほどの快楽が押し寄せた。

その心境の変化を理解したのか、男の腰の動きが早くなり始める。

「ふえ……あふっ、ひん、ああ、んんう……！」

トントンとこづくようだった動きが、グニグニと最奥に先端を押し付ける形にも変わった。

(ああ……これ、この動き……！)

「ああっ！ ひう、うあ！ いあ！ くああん！」

ピアンカの膣壁も敏感に反応し、奥へ奥へと突きこんでくる男を柔らかく受け容れる。

「さあこのまま中に出しましょうか」

「や……やめて！それだけは……！おねがい！ああっ！」

「しかし、王妃のなかはこんなにも吸い付いてきていますよ」

もう拒否の言葉はほとんど予定調和的なものだった。

ここまで来ればピアンカももうこの後の展開は悟っている。どうにもならず、男にされるがままなのは分かりきっている——。

「いや……ああ、やめ……てえ！」

「ああ……！ や、そこは……！ だめええええええ！」

言葉とは裏腹に子宮口は降りてきていて、男の先端にすっぽりとかぶさった。

男はそれをわかっていて更に強く腰を押入れて、グニグニと最奥をこじあける。

ピアンカの全身に甘い痺れがびりびりと走り、膣内も激しく痙攣した。

背中が思い切りそってペニスを激しく締め付ける。

「く……絞り出されそうですよ……！」

「ああっ、ふあ、く……ううううう！ ひうつ、ああ、また、また……イ……」

「フフ……さあ、中に出しますよ……出して欲しいんでしょう？」

「いや……ち、ちが……ああ、ふああああ！ い、いい……！」

「バチュ、チュプ、フチュ——！」

スパートに向けて男のストロークが激しくなり、ピアンカもそれに合わせて腰を振り始める。

「ああ……もうイキそうですよ……。このまま、中で……中に出しますよ……いいですね？」

男の言葉の強さと、腰から全身に広がる快楽にピアンカのメスの本能だけが最大限に引き出され、理性が崩れる。

「くう……うう、はあ、ふああ……！ ああ……く、ください……！」

「はあ、うあ、ああ……！ な、中に……中に出してエ——！」

「は、はやくう……！ もう、だめ……ガマンなんてできない……！ 出してえ！ 中に、おま○こに——！」

「あなたのを、くださいいっ！」



「く……イク——!!」
ビュクグ、ドブ、ビュルルル!!

「あ——ふああああああ!! で、出てる、出てますう……!! あ、は——わたしも、イ……くううううう!!」
腔内で熱い塊がはじけ、子宮のなかまでドロドロが流れ込んでくる感触。
ペニスは最奥に突き刺さりしつかりと固定されていた。

「あ——は、ひう……い、いあ……ああ……」
ビクビクと震えるたびにどんどん吐き出される精液が大量に胎内へと侵入していく。

「まだ……出てますよ……」
男の腕がぶるつと震える。あまりの大量の放出に体温を奪われたためだった。

「あ……はあ……、うく、はあ、はあつ、はあ……」
余韻にビクつく秘所から二人の液体が混ざり合った白濁がどろりと漏れ出す。

「はう……ん、んううう……!!」
呆けた表情で天井を見上げるピアンカ。その背後で男が再び動き始める。

「あ……まだ、するの……?」
有無を言わずゆっくりと腰を動かし始め、萎えないままのペニスと腔襞に擦り付ける。

「ま、待……って、あ、まだ、さっきのが……うあ、あああ……はう、うう……」
人形のように身体を揺らされながらも、ピアンカの口許には愉悅の笑みが浮かび始めていた——。

女賢者編 「知られざる絶頂」

昨日のモンスターとの戦いで、女賢者は致命的なミスをしてしまった。

回復呪文を使うべきところなのに、目の前のモンスターへの攻撃に夢中になっていたのだった。常にパーティ全体を把握しておくべき賢者にはあるまじきミスだった。

一歩間違えば全滅の危険性もあった。

「ごめんなさい……本当に……」

「……いい加減にしろ。同じことを何度言わせるんだ」

勇者の怒りは静かだが激しいものだった。

パーティをまとめ、率いるのは勇者だ。賢者の失態を責任をとるのは勇者しかいない。

「次からは気をつけるから……あの、だから……」

「許せというのか？ いつも次から次からといって全く改善されないじゃないか。」

「せっかくの呪文もMPも使わなければただの飾りなんだぞ」

「……ごめんなさい……」

いつにも増して勇者の言葉は厳しい。

そして厳しい言葉をかけられるだけの実力と実績、リーダーシップとカリスマ性が勇者には備わっている。

「もうお前はパーティから外す」

「え……？ そ、そんな！」

頭を鈍器で殴られたような強烈な衝撃が走る。

そう、まさか——まさか賢者の自分を外しはしないだろうと。そんな思いがあった。

だがそれが甘えになっていたのかもしれない。

「何度言ってもわからない。目の前の敵しか見えていない。自分で考える頭がない。」

それなら、レベルが低くても力自慢の戦士を入れたほうがマシだからな」

「そ……それだけは！ お、お願い！ 何でもするから……私……！」

皆の役に立ちたいという想いは本物だった。

役に立って勇者に認められたい。勇者のそばに置いてもらいたい——。そんな切ない欲求が賢者の中にある。

「……じゃあ、最後のチャンスをやろう」

「は、はい！」

「口で言っただけ、頭を使っても覚ええないみたいだからな。カラダで覚えてもらおうぞ」

冷酷に言い放った後に勇者は賢者にそっと耳打ちする——。



どうした
息が荒いんじや
ないか？

うう……
だ、ダメ……
気付かれないように
普通にしてないと……

「はあ……はあ……」
妙に頬を紅潮させた賢者が、一人街中を歩いている。ゆっくりと歩いていてはただけなのに何故か吐息は熱い。「うう……はあ、あ……うう」

勇者の要求それ自体は難しいものではなかった。街をぐるりと歩いて一周するだけ。

しかしそこにはただし書きがついた。

消え去り草で姿を消した勇者に何をされても

周囲の人に気付かれないようにしなければならぬ――。

「ああ……はあ、ん……ッ」

賢者は一人で歩いているように見えるが、

実は透明になった勇者がそばにいるのだった。

しかも賢者の尻をいやらしい手つきで撫で回している。

「どうした。息が荒いんじやないか？」

「あ……はあ、うう、だ、大丈夫……です」

（うう……だ、ダメ……気付かれないようにしないと……）

「いつでも平常心でいることが賢者の条件だからな」

「は、はい……！」

賢者が背筋を伸ばすと勇者が脇からそつと声をかけてきた。

ほんの小さなことだが、少しでも勇者に褒められたと思うと

胸の奥にぼつと熱い灯がともる。

（が、頑張ろう……。勇者さまが認めてくれるんだもの……！）

まさか勇者にこんないやらしいことをされるとは

思っていなかったが、不思議とあまり嫌な気はしなかった。

勇者の行為に疑問を感じるよりも、


耐え抜いて見限られないようにしたいという想いのほうが強い。

「うく……んっ……はう……」

（お尻を触られるくらいなら……どうってことないわ……）

自分に言い聞かせるように思い、ゆっくりと脚を動かす。

「んんっ!？」



いきなりギュッと勇者が強く尻肉を掴んできた。

驚きと痛みで声をあげてしまいかけるが何とか耐える。

形の良い賢者の尻が、勇者の手にもてあそばれて歪になる。

「ふはっ……はあ……う……ん」

（うう……おかしい……。何か、今ので急に頭が……ぼーっとして……）

そんな賢者を見て――

「あうっ……いい、んんっ!!」

――勇者は尻をひねりあげた。

「何を呆けている。だからお前はダメなんだよ」

「す、すみませ……はあ、ん……いあ……はあ……」

尻肉をてのひらを使って揺らしながら、時々指先でひねりあげる。

マッサージされているかのような心地良さと、それと相反する痛み。

（何……何なの、この感覚……）

その二つの刺激によって賢者の意識は混乱し始めていた。

（と……とにかく、普通にしてなきや……）

もう一度背筋を伸ばして姿勢を良くし、不恰好にならないように歩く。

「ん……ふう……は……あく、ん……」

だが勇者が手を動かせばすぐに背は丸まってしまふ。

頬を紅潮させ目を潤ませ、うつむいてしまふのだ。

「しっかり周りを見る」

「あ……はあ、んぐ……だ、だつてえ……」

「口答える気か？」

「ち、ちが……います、うう……はあ、はあ、はう……っ!」

勇者が厳しい口調になると賢者の背がびくんと跳ね上がる。

まるで操り人形のようなだった。

どういうつもりだ？
ちやんと街を
一周しないと
許すつもりはないぞ

やっぱり
パーティから
外すしかないようだな

あ……
は、はい……
ごめんなさい

でも少し……
少しだけ
休ませて……！

うう……
ま、待っててください……
う、くう……！

ついで勇者の手は胸に伸びてくる。
「んんっ……！」

賢者の反応は明らかだった。

勇者の手が胸に触れただけで切なげな声を漏らす。

（何……何なの、これ……！ 頭、くらくらしして……）

手の動きは触っているような優しいものであったが、

しかしそれだけで賢者は強く感じてしまう。

「ん……はあ、あう……ふう、はあ……っ！」

すれ違った中年の女がいぶかしげに賢者を見る。

（ダメ……見られて……！）

耐え切れず、賢者は大通りから一本外れた小道へと入っていった。

「どういうつもりだ？ ちやんと街を一周しないと許すつもりはないぞ」

「あ……は、はい……。……でも少し……少しだけ、休ませて……」

「ファン……。やはりパーティから外すしかないようだな」

「うう……ま、待っててください……う、くう……！ ああああっ！」

賢者が言い終わらないうちに勇者が胸の先端をつねった。

あられもない声上がり、周囲にいた何人かが振り向く。

「あ——」

慌てて咳払いし、道につまずいたフリをしてやり過ごす。

（このままじゃ……勇者さまに認めてもらえない……！）

不恰好な自分の姿に涙が出そうだった。

（うう……負けちゃダメ……ここできくじけたら、

一緒にいられなくなってしまう……！）

歯を食いしばって前を向き、再び歩み始める。

「ほう……」

勇者の感心したような声も耳に入らないくらい集中して、

胸に置かれている感触を遮断した。

（勇者さまの手だけど……今は無いものだって考えて……）

胸と手が接しているところがジンジンと疼いて熱くなっている。

だがなんとかそれを意識の外においやった。

（よし……これなら、なんとか……！）

はあ！！
おん！！

だが勇者は容赦がなかった。

賢者が慣れてきたとみるや、呪文を使ってスカートに切れ目を入れる。

「え……………!?!」

ポケットに手を入れるような形で賢者のスカートのなかに割り入る。

まずはすべすべした太股に手を這わせ、ついで下着に包まれた秘所へと到達した。

「うあ……………!」

(勇者さまに……………触られてる……………!)

最も恥ずかしい場所に手を置かれているという羞恥。しかも消え去り草を使っているとはいえ、こんな場所です。

(そんな……………こんな街の真ん中で……………!一番恥ずかしいトコロを……………!)

賢者の胸の奥が切なく締まった。

「うう……………ああ……………!そこはツ!」

しかし勇者には全く遠慮がない。そのまま下着のなかに手を入れて直接指を這わせる。

賢者の控えめな陰唇を割り開き、中指で膣口をこすりあげる。

「あひい! うあ……………はあ、ああ……………うぐ……………、んん、ふう、はあ……………」

「どうした? 濡れてるようだが?」

「え……………」

(濡れてる、って……………?)

いったいどういうことなのか、勇者の言葉の意味も真偽もわからない。

けれど勇者の表情を見るに、それが褒められるべきではないことは明らかだった。

「うう……………こめん、なさい……………!」

「ここはどうだ?」

勇者の指がうごめき、クリトリスに触れた。

「……………ツ!?! ああああツツ!」

今まで感じたことのない電流が賢者の背筋を貫き、その衝撃の後に圧倒的な多幸感が訪れる。

(何なの……………!?! この感覚……………!?! こ……………声が勝手に……………!)

「どうやら相当感じるらしいな」

勇者は嘲るように笑い、クリトリスを指先で何度もこすりあげる。

「あふつ、ひん! はあ……………あう、うぐ……………んふ、はあ、ああ……………ん、んんつ、んあ……………!」

賢者の鋭敏な性感はその刺激に素直に反応した。

(こんなの、知らない……………!何で声が出してしまうの……………!?)

勇者さまに……
触られてる……!!

そんな……
こんな街の真ん中で……!!
一番恥ずかしい
トコロを……!!

んっ……

んっ!

「お……おねがい……もうやめて……!!」
「なんでだ? イキそうだからか?」
「んっ……!!……ッ!!」

(イク……?? イクって何……!!?)

この頭のなかにある白いのがイクってこと……!!?)
「理由を言わないとやめないぞ?」
勇者に追い詰められて

もう賢者はどうしようもなくなっていた。

つい声をあげてしまう自分に向けられる

通りすがりの人の視線も痛い。

もう自ら認め、勇者の言いなりになるほかなかった。

「そ……そうよ……!!もう……イキそうだから……はう!!」

おねがい……もう恥ずかしすぎるから……

やめて……ください……!!」

「仕方ないな……」

「あ……は、はふ……」

勇者の指の感覚が遠のいた。

「うう……」

絶えず頭のなかで散っていた火花が

不満そうにくすぶりながらもなりを潜めていく。

自分が自分でなくなってしまうような感覚も

徐々に収まる。

(ああ……)

だが賢者が安堵した瞬間——

——勇者の指が乱暴に突きこまれる。

「あ、ふあ、あああああああつ!!」

完全に油断したところに指が腔内に入ったのだった。

(え!?!ダメ!ダメ!)

頭のなか、白いのが……いっぱい……!!)



耐える準備を何もしていなかった最も弱い性感帯は
奇襲の淫激によって一瞬で崩壊してしまった。

(ガマンを……！ ガマンしないと……！)

いや……もうムリ……！！

「あつ！ふうつ…… ツ！…… ツ！

……

……んはあああああああああああつ！」

路上であられもない声をあげながら
賢者は絶頂に達する。

「んんっ、ふあ、ああ……うぐ、い……う……う……！」

しかも生まれて初めての絶頂が膣内のもの。

鋭敏すぎる感覚をクリトリスで高められ、

波が収まりかけたところに膣内に指を挿入されて、

無理矢理。

「あふ……う、ふあ……や、ああ……」

地面にぼたぼたと愛液をしたたらせながら

賢者はその場に崩れ落ちる。

お前
街の中で
こんなに感じるような
Hな女だったんだな

どうして……
こんなことばかり……
や、やっぱり
おかしい……です……!

あはッ……!
ん、ふぁ……
んんっ、くう……!

勇者さま……
おねがい、もう……!

身体を震わせている賢者を抱え上げ、路地の柵に腰かけさせる。

「あ……うぐ、はあ……うあつ……!」

賢者に落ち着く暇を与えずにすぐに愛撫を再開する。

「やめ……て、くだ……さい……んんっ!」

無理矢理に賢者の股をこじ開け、内股と秘所に指を這わせた。

(ダメ……まだ頭のなか、白いのが残って……おかしくなる!)
さつきよりは人通りの少ない路地にいるということも相乗して、

賢者の感度はより上がっていた。

「ああ……だめえ!」

勇者の責めもより大胆になっていて、

くちゆくちゆと賢者の秘所で水音を立てた。

(うそ……何これ、こんなに濡れて……音が……!)

勇者に弄ばれているという実感が胸の奥にぼつと炎をともし。

みるみるうちに体温が上昇し息が上がった。

「はあ……はう……はあ……! んふ……ふうっ……!」

徐々に大きくなってくる声を抑えることができない。

(勇者さま……もうこれ以上はあ……!)

背後にいる勇者を振り返り、哀願するような目線を送る。

だが勇者は相変わらず何も応えなかった。

消え去り草の効果で表情すらもわからない。

本当にこの人は、あの勇者なんだろうか。

そんな疑問すらわいてきて、興奮の裏返しのように

恐怖感が浮き上がってくる。

「……んんっ、勇者さま……おねがい、もう……ああ……!」

けれど、その興奮と恐怖感の双方が

ぎりぎりまで賢者の性感を引き絞り張り詰めさせる。

愛液は際限なくあふれだしてもう止めようもなくなっていた。

賢者はもう自分のなかにある感覚を抑えるために

内面に没頭するしかない。

くぐもった喘ぎ声を漏らしながら目を閉じてじっと耐える。

「あ……」
唐突に勇者は賢者の背を離れ正面にまわった。

「え……え……？」

戸惑う賢者を尻目にいきなり服に手をかけてずりおろす。賢者の上半身が露になった。
「ひゃ……！？ な、何するんですか！？」

あわてて手で胸を隠すが、豊満な双丘はそのくらいでは収まりきらない。

「こんなの、もし誰かきたら……うあ、あ、はあん！」

続く喘ぎ声は突然の秘所への刺激によるもの。

「ゆ、勇者さま！？ 何を……あ、ふあああ！」

賢者の太股の間に勇者の顔がある。内股にひやりとした耳と頬、くすぐったい髪の毛の感触。

そして膣口になつとりとしてそれでいて少しさらさらするような粘膜の感触——。

（や……やだ……な、なめてる！？ 私のアソコを……勇者さまが……！！）

最初は性感よりも驚きが勝った。

まさかこんな卑猥な行為をされるなんて——いや、そんな行為が存在すること自体が理解できない。

生まれてからこれまで、僧侶だった時代も賢者になってからも誰にも触れられたことがない場所に勇者が舌を這わせている。

「う……ああ……はあ……！！」

驚きの後には気が遠くなりそうなくらいの羞恥と、どつとあふれ出すような快樂。

「はう……ああ……、はん、ふう……ッ、く……い……あああああッ！」

いつしか声は大きくなっていて、そのせいだろうか——小さな鬨入者を招いてしまう。

「え——」

軽い足音と共に、一人の子どもが路地の入り口に現れる。

「あ……ああ……！」

賢者に気付き、不思議そうな視線を向けてきた。

「……子供が……見てる……ッ！んんっ！」

「大丈夫だよ、あんな小さな子供……どうせ何が起こっているのかも分かってないよ」

「で、でも……！」

勇者が徐々に口を開いてくれたという事実にも気付かないほど賢者はいっばいになり、頬を真っ赤に紅潮させる。どうすればいいのかわからず、呆けたような表情を子どもに向けるほかなかった。

「ああ……うう……は、んんっ……！」

片手は胸を隠すのに使い、もう一方の手は口にあてて喘ぎ声を抑えている。

両手が使えないため勇者を押し戻すこともできず、ただひたすらしがみつくとように内股を締めた。

（お願い……見ないで……！ はやくどこかへ行つて……！）



だが子どもは一向に立ち去る気配を見せない。子どもなりに賢者の様子から

性的なものを感じとり、興奮し始めている。

(ダメ……見ちゃダメよ、こんなの……!)

ぴちゃ、ちゃぷ、ぷじゅ——ずぞっ!

賢者の高ぶりを感じ、勇者は容赦なく音を立てて

舌を這わせ、クリトリスに吸い付く。

「んぐ……ふ、あ、あ……あああつ!」

子どもは路地の入り口に立ったまま、

音に耳をそばだてて賢者の痴態に目を見開いている。

「こんな状況なのにクリトリスが勃起してるな?」

「う……あ、はっ……あう、うう……!」

賢者はがくがくと全身を震わせながらかぶりを振る。

「そんなにイカせて欲しいのか?」

「あ……ちが……うう、やあ、あああああ!」

賢者の膣口が自然と勇者の舌に吸い付き、

なかへと招き入れるような動きをする。

充血したクリトリスは勇者の唇に尖った感触を残した。

(あたまのなか、へんに……ああ……!)

何かくる……また、キちゃううう……!)

圧倒的な快樂の波が

うぶな賢者の理性を一気に押し流した。

むきだしになった本能はただただ悦樂を貪る——。

「う……ああ、はあああん!」

子どもと目を合わせながら賢者は絶頂に達した。

(見られて……見られながら……私……)

ぐったりと柵にもたれかかる賢者の股間から、

後から後から愛液があふれた。

賢者の足元で半ば水たまりのようになったそれを

遠目から物珍しげに眺めながら、

子どもはさっと立ち去っていった。

いつしか二人は奥まった路地へと入っている。

「い……ああ、はあ……！　もう、やめ……て……休ませて……はあ、んふ……っ」

勇者のなかには今の賢者の姿態を独占しておきたいという想いと、他の者にも見せつけてやりたいという想いの双方がせめぎあっていた。この女を誰にも見つからないように隠しておきたい。自分だけのものにしたかった。

だがその一方で、さっきのように皆に見せ付けることで性感を引き出してやりたいとも思う。

また、ちよつとした仕置きのもつもりで始めたこの行為にいつの間にか夢中になっている自分を冷静に見下ろす自分もいた。自分でもわけのわからない衝動に駆られるまま、勇者は自らの陰茎を取り出した。

パン——！

「あひい！？」

衝動のまま、賢者の美尻に平手を振り下ろす。良い声でなく賢者を見るといくらか心のなかのちよつと暗れた。心を決め、賢者の衣服を全て剥く。

「ゆ、勇者さま……！？　な、なにを——」

そして目の前で揺れている尻をがっしりと両手でつかみ、ペニスを押し当てた。

「え……そんな、まさか……！　待って、こんな場所で、私……い、あ、あああああ……っ！」

十分に濡れそぼっているのにそれでもなおきつくギチギチと締め付けてくる賢者の膣壁。

力強くそこをかきわけて、無理矢理腰を押し出す。

「ああ　あ……あぐ……く、いた……い、うう……！」

ぐぬ、ぬち——ぬちゆ、ずずずっ！

勇者も締め付けられて感じる亀頭の痛みを耐えつつ、全てを挿入した。

「あ——か、はあ……うあ……い、うう……っ！」

さすがにきついだらう——。そう思い、しばらくは動かずに賢者の様子を見る。すると——。

「あ……は、うう……い、はあ……、はあ！　ああ……ん、ふあああ、あ……」

あろうことか、貫かれたばかりだというのに賢者はゆるゆると腰を動かし始める。

「勇者さ、ん……ああ……はあ、んう……！」

ちらりと振り向いて見せた表情は苦しげながらも、どこかに喜びが含まれていた。

それを見て勇者は何を思い、どう解釈したのか。口許を歪ませ、一気に腰を動かし始める。

「ああっ！　はっ、ああ……！　きゅ、急に、そんな……ああ、いうう……！」

「フン……そんな力才をして、もう感じてるのか？」

「ち、ちが……私……勇者さまと、勇者さまのこと……あ、ああ、うあああああ……ん！」

こんな状況でこんな場所で犯されているというのに、賢者は従順な子犬のように振り向いて勇者を見上げる。だが勇者はそれに応えず、腰を振り抜いて賢者の最奥を突くことに集中した。



「ああ……ダメ……だめえ、はあ、あああッ!」
裏路地とはいえど誰か来るかもしれない——
だが来てもいい、見られてもいい——。

そんなぎりぎりの衝動が勇者を高まらせる。

「あ、な、なかで……大きく、なっ……んん!」

「く……!」

どぶ、どぶ、どぐ——!

「あつ、い……のが、いっぱい……でてる……」

ああ、勇者さ……ふああああああんっ!」

勇者のまだ若い精が賢者のなかで爆ぜた。

どろどろに濃く熱い精汁が賢者のなかにあふれ、

子宮まで汚していく。

「うあ……ああ、はあ……うう、あ……はあ……」

(これが……男の人の……なの……?)

膣内でペニスが脈動しているのを感じながら

賢者は奇妙な満足感に満たされる。

(私のなかで……勇者さまが……。私に……)

こんな場所でこんな酷い行為で、

ほとんどレイプされたようなものなのに。

それでも賢者は胸の奥に切なくうずくような

喜びを感じてしまっている。

(ああ……私、やっぱり勇者さまのことが——)

「んんっ!?!」

背後からの一突きが賢者の思考をかき消す。

「もう一回だ……いいだろ?」

「ふえ……え、あ……あああああ!」

勇者の若い肉杭は一度放出しても全く萎えていない。

むしろさつきよりも一回り大きくなり、

硬度も高まったような状態で

再び賢者の膣内を蹂躪し始める——。

「ああ、はあ、ああ……ん、ふああ……！」
ずじゆ、じゆぐ、ぬぢゆ——！」

勢いよく勇者の腰が動き、奥の奥までかき混ぜる。二人の結合部からどくと粘性の液体があふれる。賢者の本気汁と勇者の精液が攪拌され、それは泡立ち白く濁ったものだった。だが、あふれだす量自体はそれほど多くない。

勇者の放出量と先ほどまでの賢者の愛液の量を考えれば少なすぎ上品すぎるほどだ。

「はく……んんっ、ふあ、ああああ……！」

それは二人の相性が絶妙に合っていることの証左でもあった。

液体があふれだす隙もないほどびったりと肉棒が蜜壺に収まり、形がハマっている——。

(ああ……勇者さまのが、なかで苦しいくらいにいっぱいになって……！)

勇者の精液は賢者の子宮内にどんどん入り込んでいき、そこでとぐるを巻いているかのようにだった。

「う……おおおっ！」

「え……ま、また大きく……!?」

勇者が獣のような雄叫びをあげると、賢者は反射的に膣壁を締めた。

「はひっ……ダメ！ダメです！勇者さま！こんな場所で……！あああ、う……うああ……！」

びゆく、どぶ、びゆぶるっ——！」

「んっ、熱っ、あうう、はああああああ！」

勇者の二度目の絶頂。また大量の精液が賢者の膣内に吐き出される。

「く……おお……っ！」

だが今度はそこで終わらず、勇者は腰を動かし続ける。

(そ……そんな、出しながら……なんて……！)

放出した精液をそのまま子宮口になすりつけているかのようにだった。

(でも……私の身体、どんどんえっちになって……欲しい……欲しいの、勇者さまのが……勇者さまがあ……！)

「あうう……く、はあ、ああ、はあ……も、もっど！はあ、ああ……うう、ふうん！」

勇者のオスそのものの行為に感応し、賢者も貪欲に腰を振る。

二人の良すぎる相性がありえないほどの官能を生み出していた。

「はう……うう、はあ……！」

二度目の射精がやっと止まった。それと同時に勇者の腰の動きがより強く乱暴なものになる。

「うぐ、ひぐ……!! ああ、あうあ……!!」
どれだけ声を抑えようとしても奥を突かれる度に
鼻先から息が漏れた。

ペニスの一突きことに内臓がかきまわされ
持ち上がるような凄絶な快樂。

ずじゅ、ぢゅぬ、ずず、ぶじゅる——!!

結合部から漏れ出す音もこれ以上ないほどに卑猥だった。
もう二人はほとんど無意識と本能にだけ支配されて
腰を合わせ続ける——。

そして程なくして訪れる三度目の限界。

「あ——お、大き、い……ああ、だ、めえ、もう……」

勇者の睾丸がきゅつと引きあがり、

二人の結合部を覆い隠すようになる。

「出す、ぞ……!!」

「あ……は、はい……!! く、くださ……いい!!」

最奥まで突きこまれ、膣壁は隙間無くぐつと締まり

子宮口は龟头を包むように下がる。

びゅる、どぶ、びゅぐく——!!

「ううう……ふあ、ああああああん!!」

どぶ、ぐぶ、びゅぶ——!!

（ああ……なかで、勇者さまのものが……はねてる……!!）

髪を振り乱して賢者はもたえ、何度も何度もイキ狂う。

だが苦しげに濡れたまぶたの裏には

快樂と精で満たされ悦びに染まる瞳があった。

「あふ……うく……あ、はあ……」

表情にもどこか蕩けたような情に流されるような
淫らながらも美しい色が宿っている。

（なか……本当にもう、いっぱい……）

どろりとした濃厚な熱さが胎内でとぐるを巻く感覚に
賢者は身を震わせる。

その震えはもろろん嫌悪ではなかった。

アリーナ編 「耐える姫」

熱をだしたクリフトのため、

アリーナは単身パデキアの洞窟を探検した。しかし種は見つからなかった。

あせるアリーナの前に3人組の男たちが現れる。

“自分たちはパデキアの根っこを持っている。”

もし欲しければいっしょに馬車に乗り、ミントスにつくまでの間オレたちの言うことを聞いてくれるかな？”

……と。アリーナは危険を承知で男達の馬車に乗り込んだ。

「ほう、じゃあその神官の野郎を助けるためにあんなところにね」左隣に座っている男がアゴをさすりながら興味深げに言った。

「野郎、だなんてそんな言い方しないで。」

クリフトは私の立派なこ……えつと……私の従者なんだから」

「？ 従者がいるなんて、お嬢ちゃんが高貴な身分なのかい？」

「へ！？ いや、それは……」

口こもるアリーナを見て男達は目配せし合う。

ただのやんちゃなはねつかえり娘かと思っていたが、

確かに言われてみれば服や装飾品の素材は高価そうに見えた。

これは思わぬ掘り出し物かもしれない……と男達はほくそ笑む。

男達二人はアリーナとの距離を詰めた。

腕と腕、腰と腰が触れるほどに密着する。

「……ッ」

不快げに眉をひそめるアリーナだが、今はまだ下手に出るしかない。

「……あ、あの！ あなた達はどんな仕事を……？」

「ん？ ああ、俺たちはそうさな……商人さ」

「ハハハ！ なるほど確かに商人にはちげえねえ」

商人という言葉がそんなにおかしいのか。

男は機嫌良さげに腹を抱えて笑う。

（なんだか気持ち悪い……）


アリーナは今更ながら不信感を抱き始めていた。

こ…この人達……
何？
どういつつもり
なの……？

どうした？
まさかイヤとは
言わないよな？

お嬢ちゃんは
パデキアの根が
欲しいんだものな？

男達はさらに距離を詰めてきて、
アリーナはもうほとんど身動きできないほどだった。
不快さにアリーナが身をよじると同時に男の手が伸び、肩に触れる。
「な、なに？」
「んん？ ちよつとしたスキンシップじゃないか」
左にいる男がアリーナの細い肩を抱き寄せた。
「そつちにはっかかりサービスするなんてずるいぜ？」
今度は右隣の男が腰に手をかける。
さわさわとゆするようにしてアリーナの腰を撫で回しながら、
自分の太股を密着させてくる。
（う……こ、この人達……。何？ どういつつもりなの……？）
吐息、太股、腕、肩。密着しているところから感じる
生暖かい体温が何とも言えず不快だった。
「どうした？ まさかイヤとは言わないよな？」
お嬢ちゃんは、パデキアの根が欲しいんだものな？」
「く……ッ」
「どうだ？ 俺たちの手の感触は？ 気持ちいいだろう？」
言いながら男達はねっとり肩と腰を撫で回す。
耳元でつぶやかかれ、生暖かい吐息が耳朶に流れ込んでくる。
いつもそばにいる人物……
そう、クリフトの息遣いを時々感じることはあったが、
それはただ単純に暖かく安心できるものだった。
けれど、この男達の手つきや吐息には独特の生臭さや獣臭さがある。
（こ、こんなの……まだ魔物を相手にしてるほうがマシだわ！）
怖気を感じ、アリーナは身を震わせる。
それに男達はつけこんでますます調子に乗り始めた。



男の手が伸び、アリーナの股間に触れた。

「ひゃっ!?!」

あまりの出来事に上ずった声があがる。

頬を真っ赤に染めながら必死に男の指の動きに耐える。

下着の布を股間にゆっくりとこすり付けるようにして男は慎重にそこを愛撫した。

「く……………うう……………」

誰にも触られたことのない場所をこんな行きずりの男に

いいようににされているという屈辱がアリーナを襲う。

(こんなの……………許さない、のに……………! パデキアの根のことさえなければ……………!)

だが今は耐えるしかなかった。

「そう、それでいいんだよ、お嬢ちゃん。」

ちよつと触るだけだから大人しくしててくれよ……………」

(何が“ちよつと”よ! もう十分すぎるくらいだわ!)

執拗に動き続ける男の指。

アリーナが睨みつけても全く動じない。

(もう……………こんなの、恥ずかしすぎる……………!)

アリーナの感情が羞恥に寄っていることを知り、男は次の行動に出た。

秘所をまさぐった指をわざと見せ付けるようにして自らの鼻先に持っていき――

すんすんと鼻息をたててにおいを嗅ぐ。

「な……………! あ、あなた、何して……………!」

「ああ、いい香りだぜ……………味のほうはどうかな……………」

「……………!」

今度は指をしゃぶり始める。

「フフ……………まだ濡れてないから、味のほうはよくわからないな……………」

言いながら、唾液で濡れた指を再びアリーナの股間に近づける。

「ちよ、ちよつと! やめなさい、そんな……………!」

顔を真っ赤にして叫ぶアリーナをよそに、男は指を押し付けてくる。

じつとりとした湿り気が下着ごしに感じられた。

(う……………き、きもちわるい……………!)

「ククク、いいぜ、お嬢ちゃん。気分が出てきたんじゃないか?」

アリーナの秘所はまだわずかではあるが湿り気を帯び始めていた。

知ってるかい？
女は感じると
ここが徐々に
濡れそぼってくるんだ

ほらほら
濡れてるぜ？
お嬢ちゃんのこと

濡る
濡る

う……
そ……そんな……!

へへ……
遠慮すること
ないんだぜ……
もっともっと濡らせよな

どうすれば……
どうすれば……
いいの!?!?

ちゅ
ちゅ

「な、何よっ！ いやらしい笑い方をして……!」

「ほらほら 濡れてるぜ？ お嬢ちゃんのこと」

「!?!」

男が股間に置いていた指をアリーナの眼前にさらす。

その指は確かに何かの液体で薄く光っていた。

「う……そ、そんな……!」

「へへ……遠慮することないんだぜ……もっともっと濡らせよな」

言いながら、男達はアリーナにおおいかぶさる。

股間に指を這わせるだけでなく、胸や首筋をも愛撫し始めた。

「ん……は……」

一人がアリーナの胸をじっくりと解きほぐすようにもみしだく。

もう一人は太股に鼻先をあて、引き締まったそこをぞろりと舐め上げた。

「うう……く、ほう……」

与えられる刺激にアリーナの身体は否が応にも反応してしまう。

「着やせするタイプなのか？ なかなか良いカラダしてるじゃねえか……」

「いや、やめ……!」

「おっと、抵抗するんだったらパデキアの根はやらないぜ?」

「く……うう……!」

アリーナの頬は真っ赤に紅潮し、額にはうっすらと汗が浮かんでいる。

男はその汗すらも甘露だというかのように舐めあげて味わった。

(どうして……こんな奴らに、いいように……!)

アリーナの胸のなかで憤りが渦巻く。

だが、パデキアの根のことを言われるたびに気力が小さく萎んでしまう。

アリーナの眼下では、今も男達の愛撫が続けられていた。

胸をもみしだく指の動きが卑猥で扇情的で思わず目を逸らしたくなる。

だがその一方で魅入られたように目を逸らすことができな自分もいた。

(どうすれば……どうすればいいの!?!)

初めての感覚がもたらしてくる戸惑いのなかで、

アリーナは半ばパニック状態になっていた。

いやっ!!
ちよつと
何して—

うああッ!!

こんなの……
ありえな……い
何……何なの
いったい……!?

ダメ……
このままじゃ
私……!

へへ……
やっぱりな
ぐちよぐちよに
濡れてやがるぜ……

どうだ?
お嬢ちゃん?
ここがいいんだろ……?

——ついには下着のなかへと指を差し込んでくる。

「いやっ!! ちよつと、何して——く、うあああああッ!!」

男が問答無用で指を動かし始めるとアリーナの口からは嬌声が漏れた。

「へへ……やっぱりな、ぐちよぐちよに濡れてやがるぜ……!」

大きな興奮のなかに満足感をおわせつつ、男は指を操る。

ぐちゆ、ちゆ、くぶ——!

男の指の動きに合わせてアリーナの秘所は面白いように音を立てた。

「やめ、やめなさ……! ああ、はあ、うああ……!」

男が指を動かすたびに背筋に電撃が走る。

その全く新しい感覚にアリーナは圧倒されていた。

(こんなの……ありえな……い、……何……何なの、いったい……!?)

何が何だかわからない。

自分がとんでもなく恥ずかしい行為をされていることだけはわかった。

男の指は執拗にアリーナの秘所の形をなぞり、ゆっくりと上下した。

「どうだ? お嬢ちゃん? ここがいいんだろ……?」

「う……あふ……ああ、く、うああああ……!」

明らかにアリーナの声に淫靡な色が混ざり、男達の股間を刺激する。

「ククク……かわいいねえ……」

「何にも知らない女に快感を教え込むのは楽しいもんだ」

まだ年端もいかない少女が淫らな喘ぎ声をあげる姿は

男達によって何よりの馳走だった。

「んんっ、ふあ、ああ……ふ……くう……」

下から上へとゆっくりと撫で上げる男の指の動きに

アリーナは完全に翻弄されている。

さっきまで感じていた男達の大衆の生臭さや獣臭さもいつしか消えて、

自らのふわふわと浮き上がるような感触だけが全てになっていた。

「んく……はあ、ふあ……」

(ダメ……このままじゃ、私……!)

アリーナの意識に最後の理性の光が灯る。

「う……はあ、うう……くあ、やめなさ……い!!」

ドン——!

アリーナは最後の一线を死守するべく男の身体を跳ね除けた。

「お……つと……」

「く……はあ、い、いい加減、調子に乗らない……で……うう、はあ、はあ……!」

男はアリーナを見て肩をすくめた。アリーナの行為に怒るでもなく、ただ静かに見遣る。

「フン……これで契約はご破算だな……」

「え……?」

「パデキアの根をやるわけにはいかないな」

薄く笑って、男はキメラの翼を軽く放り投げた。

「あ……!」

ゴオオオオオ——! 男達と馬車は消え去り、荒野にただひとりアリーナだけが残される。

「そんな……パデキアの種がないと……クリフトが……クリフト……」

ただひとつの手がかりが飛び去ってしまったという事実のアリーナは打ちひしがれる。

(でも……まだ、ミントスに行けば間に合うかも……)

震える脚を叱咤してアリーナは立ち上がる。

(も、もう一回頼み込むしか……!)

転げるようにしてアリーナは荒野を走り始めた。

「はあ、はあ、はあ——!」

走って走ってようやくたどり着いたミントスの町。その門の近くに、さっきの男達が待ち構えていた。

(いた……!)

いきなりキメラの翼で飛ばれたという恨みよりも、見つけることができたという安堵と喜びが勝る。

アリーナはほとんど飛びつくようにして、男の衣服にすがりついた。

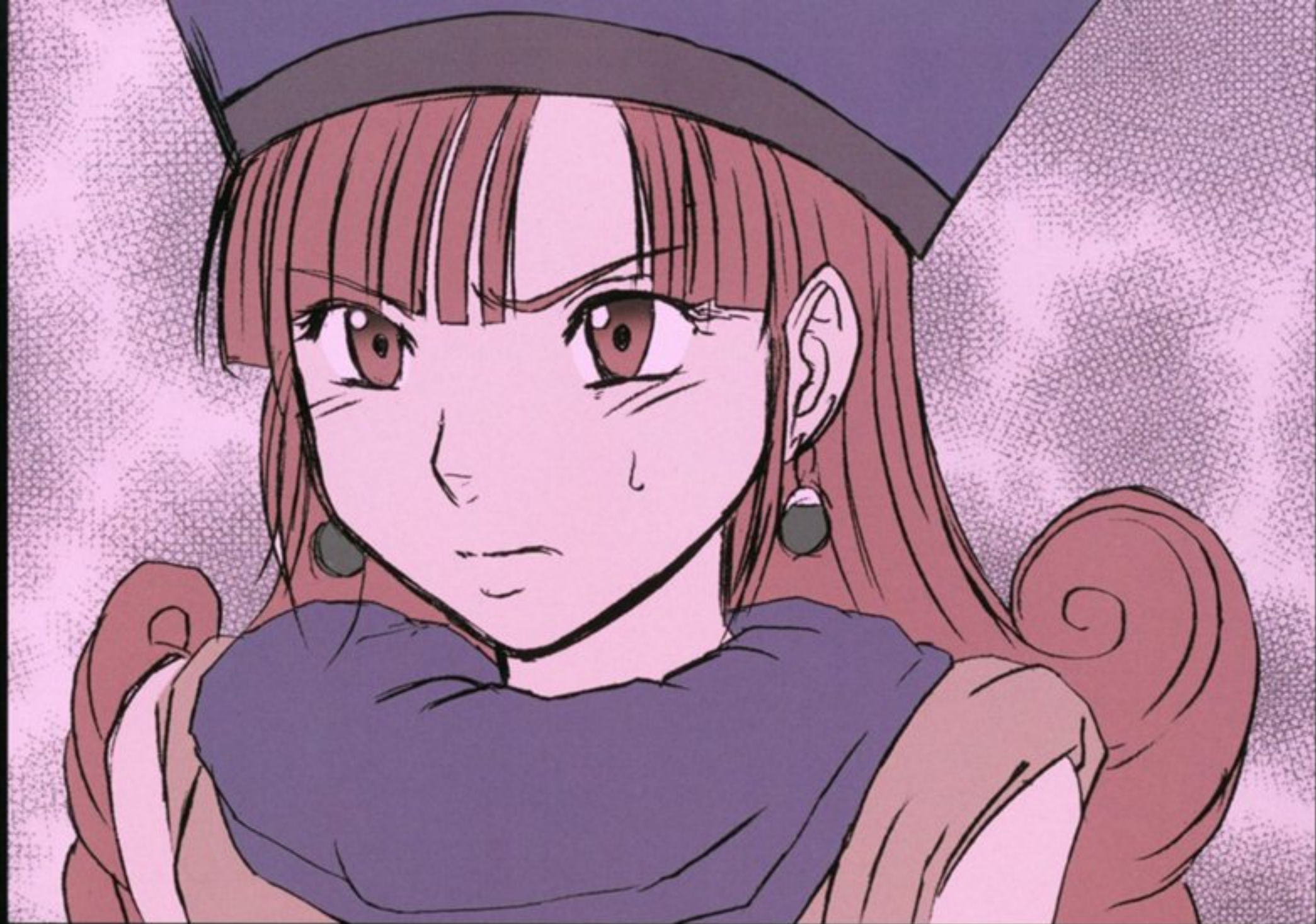
「ま、待って……! はあ、はあ、はあ……!」

「おやおや、ここまで走ってきたっていうのかい? たかが従者のためにお優しいことで」

からかうように笑い、男は汗まみれのアリーナを擁護する。

「聞いたぜ? アリーナちゃん。宿屋であんたの従者が苦しんでたよ」

「ああ……!」



言葉が出ない。

クリフトが苦しんでいる姿を想像すると胸が締め付けられる。

「いいのかい？ このパデキアのねっこがないとどうなっても知らないよ」

「……」

男に言われるまでもなく、もうアリーナは覚悟していた。

あくまでうぶな姫としてのものだが――

想像できうる限りの恥辱を受けてでも、

クリフトを助けたいという想いがある。

同時に、いまこの瞬間にもクリフトは苦しんでいて、

自分はバカバカしいことに懊悩しているという自責の念もあった。

「さつきみたいなのやんちゃはもうしないな？」

「……し、しません……しませんから……！」

「約束するな？」

「はい……」

「じゃあ、改めて……俺達の言いなりになるんだったら、

パデキアの根をやってもいいぜ？」

本当にこの男達の言う通りになっているのか。

心の奥で警鐘が鳴り響く。

けれど、そうするしかないという諦めと覚悟も浮上してきていた。

(クリフト……)

その愛しい笑顔を思い浮かべてから、アリーナはこくと頷いた。

クク……
うぶなお嬢ちゃんには
こういうプレイの
知識はないのかな？

おほっ……
よく引き締まった
極上のカラダだな……

くっ……！

こんなことをして
ただで済むと
思っ……！

男達に連れられるがまま、宿の一室に連れ込まれる。

「え……？ ちよ、ちよつと待つて、ここは……！」

あろうことか、男達がアリーナを連れ込んだ宿は

クリフトが泊まっているのと同じ宿だった。

しかもわざわざクリフトが寝ている部屋の隣に部屋をとっている。

（こ、こいつら……わざとなの！？）

だが——今のアリーナはパデキアの根を、

ひいてはクリフトを人質にとられているようなもの。

男達にされるがままになるしかなかった。

「こんな……ロープで縛って……、どういうつもり！？」

「クク……うぶなお嬢ちゃんにはこういうプレイの知識はないのかな？」

アリーナの四肢をしつかりと拘束してから、衣服を一枚一枚はいでいく。

「おほっ……よく引き締まった、極上のカラダだな……」

「くっ……！ こんなことをしてただで済むと思っ……！」

気丈に吠えるアリーナの眼前に、パデキアの根を持つてくる男。

「あ……」

「自分の置かれてる立場をもう一度よくわかってもらわないとなあ？」

「そうだな……お嬢ちゃんが抵抗するたびに、

根を少しずつちぎっていくっていうのはどうだ？」

その言葉の通り、男はパデキアの根を指先で少しだけちぎった。

「や、やめて……！ お願い！ そんなことしたら……！」

「じゃあ、素直になつてもらわないとな？」

「わ、わかったわよ……」

アリーナは力なく身体を横たえた。

男達は次々と衣服を剥ぎ、ついにアリーナの美しい肢体が露になる。

（うう……は、恥ずかしい……！）

羞恥に震えながらもアリーナは必死に耐えた。

それを尻目に男達は遠慮のない視線をまわりつかせる。

意外なほど豊満な胸、細い腰と引き締まった太股。

十分に肉感的でありながらも、程よくついた筋肉が若さ青さを感じさせる。

男達にとってはまさに垂涎の肉体だった。



ダメ……声
だしたら……!

感じてるところを
見せたら……
ますます
つけあがられる……!

男達の手が伸びて、遠慮なしにアリーナの身体をまさぐる。一人は胸をもみしだき、もう一人はいきなり股間へと指を這わせた。「んん……く……んんっ!」

「そうそう、そうやって大人しくしてればいいんだよ……」男は薄く笑いながら指の動きを徐々に早くしていく。

「んう……うう……!」

必死に声押し殺して刺激に耐える。

わずかではあるが、乳輪も紅潮して大きくなっている。

「へへ……馬車でやってたときより感じてるんじゃないか?」

「気持ちいいんだったら もっと声出しててもいいんだぜ」

耳元で男が囁くと、アリーナはびくりと肩を震わせる。

「うう……くう……は、あく……」

必死に唇を噛み、かぶりをふって男の言葉を拒否する。

いたいけなその仕草に男は嗜虐心を刺激され、指の動きを激しくした。

——ちゆく、ちゆ、じゅぷ!

「あう、あ——」

クリトリスと乳首への継続的な刺激によって

アリーナのそこは十分に濡れそぼっていた。

指が少し動くだけで淫らな水音が鳴ってしまう。

(ダメ……声、だしたら……!)

隣の部屋ではクリフトが寝ている。

その事実がなぜか「胸の奥を熱くさせる。

(感じてるところを見せたら……ますますつけあがられる……!)

だが男達はそんなアリーナを追い詰めるべく更に刺激を与えていった。

もう一人の男はアリーナの柔肌をねっとりとした手つきでなでまわし、

力の人れどころを無くさせる。

「ああ……あ、うああううッ!」

脱力させられて思うように声を抑えることができなくなってしまった。

(クリフト……お願い、起きないで……!)

全身に汗を浮かべ、そして目尻にはうっすらと涙を浮かべ……

アリーナは祈った。

気持ちいいんだったら
もっと声出してても
いいんだぜ

アリーナの痴態に男達の猥欲も十分に刺激されている。

目配せすると、一人がアリーナの身体を押さえつける役にまわった。もう一人は股間の剛直をむき出しにしてアリーナのまたぐらを掴む。

「そろそろもつと奥まで欲しいんじゃないか？」

「……ッ！」

そう言われて初めて男がしようとしている行為に気付く。

「んう……！！！」

「おつとウブなお譲ちゃんでもコレが何だかは分かるのか……ククク」

（いや、やめて……！！ そんなもの……！！）

「お嬢ちゃんのここはひくひくしながら俺のを待ってるようだな」

勝手なことを言いながら、男はアリーナの股間に肉茎を押し付けた。

二、三度入り口を往復し……十分に亀頭の先端を湿らせてからゆっくりと挿入していく。

「あう……ん、ぐ、うううんんんっっ！！！」

「お嬢ちゃん、高貴な家の出なんだろ……？　へへへ、たまんねえな……良いところの娘を犯すのはよ……！！」

男は恍惚としながら言葉を続ける。

「しかも隣には従者だか何だか知らないが……お嬢ちゃんと仲の良い野郎が寝てるんだろ？　病気でよお……」

「んんっ！　んんんっ！」

「ヒヒ、それなのにお嬢ちゃんときたら、俺達の前で股開いて喜んじゃって……隣のオトコが泣くぞお！」

ずん……。

「——あひんっ！！！」

男が思い切り強く腰を打ち付けて、アリーナの中に肉茎をぶちこむ。

「あ——い、た、い、い——」

息もできぬままアリーナは必死に男が与えてくる衝撃に耐えていた。

とてつもなく大きな喪失感。身体の芯から何かがすっぽりと抜け落ちてしまったような感覚。

「おら、動くぞ……！！！」

「あ、は、あ、んあ、あ……」

ずく、じゅぶ、ず、ぬず——。

アリーナは半ば人形のように男にされるがまま突き入れられ続ける。

肉体の痛みと衝撃にはすぐ慣れた。

けれど、余りにも大きな喪失感はなかなかなくなるらない。

胸とお腹の奥が麻痺したようにじんじんとしびれ、感情を吸い込んでいってしまう。

「はああつ！うあつ！やっ……ああつ！」
目の前に広がっている光景。自分が男に犯されている姿。けれど——。まだこれで終わりじゃない。

（そ、そうだ……アレを……手に入れないと……パデキア……）
壊れかけていたアリーナの瞳に理性の光が灯った。

「あうう……く、はあ……うう……！」
人形のようになっていた反応にも生気が宿り始める。

「おお？ どうした？ 急に元気になってきたじゃねえか」
「く、うう……はうう……うく……はあつ！」

（パデキアの根を……手に入れて……そしたら！）
男のセリフを無視して意識の外に追い出して、自分の目的にだけ集中する。

肉体の反応によつてさすがに頬は紅潮して目は潤んではいる。だが、
（負けない……絶対に負けない……！）

強い意志を胸のうちに宿らせて必死に耐えた。
肉棒で突かれながらも、下から男を見上げるようにして睨む。

「くふつ、うう……はう……ううつ」
声も必死に押し殺してせめてもの抵抗を表現する。

「へへへ……いいぜえ……いいぜ、たまらねえよ、そのカオ……！」
しかしそんなアリーナにとつての誤算は、男がそんな気丈な女を見て随喜を募らせるような変態的な性欲の持ち主だったことだろう。

せつかく組み敷いた女が人形のようにされるがままになってしまふと面白くない。
「良家のお嬢さんっていうのはいいね……場末のメスガキとは違う、プライドつてもんがあらあな……つと！」

「ひぐ！？」
どんなものであれ反応を返して来るほうが犯し甲斐がある。

それが気丈な反応ならなお甘露——そんな風に考える男だったのだ。
「うおおおつ……！」

男の動きはアリーナの反応を境にしてどんどん激しくなっていく。
「うう、くう……はひ、ひん！ うぐう……！」

何度も何度も最奥に先端を擦りつけ、その味を徐々にアリーナに覚えさせる。
（うう……息苦しい……、けど、感じてなんかいない……。これならさっきのほうが……）

だがまだ未開発なアリーナの膣内の反応は鈍かった。
「へへへ……一発目が、そろそろ……！」

男はアリーナの様子を気にした風はなく、身勝手に肉棒を突き入れ続ける。
何度か大きなストロークを繰り返した後に最初の絶頂が訪れた。



「んふ、んんっ、あふ、んあ——！」
息詰まるような一瞬。

男のものが自分の胎内で

どくどくと震えているのがわかった。

「んんんッ……んんんんんんんんんんッ！」

それはアリーナにとっては

初めてで不可思議な感触だった。

男の乱暴な動きに

ほとんど感じてなんかいなかったのに、

射精された瞬間には快感とはまた別の

愉悦を感じてしまっている。

大きな喪失感が満たされていくような——。

(な、何なの……この感じ……)

戸惑うアリーナの様子を見て、

男はニヤリと笑みを浮かべる。

そしてそのまま、萎えかけた肉棒を

再び律動させ始めた。

「あ、え……？」

「二回で終わりだなんて誰も言っていないだろ？」

「……………！」

「覚え込ませて、刷り込ませてやるよ、

お嬢ちゃんのカラダにな……！」

室内には淫蕩な匂いとアリーナのくぐもった

喘ぎ声が充満していく——。

「も、もういいでしょ!? おねがい……! はやくパデキアの……はうっ!」
それから三時間。アリーナはまだ男たちに犯され続けていた。

「いやあ、もう、だめ……やめ、てえ!」
もうなりふり構わずに拒否の言葉を紡ぎ続けている。

「気丈さはわずかに残ってはいたが——もうほとんど体をなしていなかった。
(ダメ……どうして、どうしてこんな……オトコの人のモノがあ……!)

「ああ、やあ……! もう、い……やあ、あああ、ふあ……んんっ!」

最初、クリトリスを触られていたときよりも直接的な刺激は少ない。

けれど、ずっと継続的で心地良い波のある刺激が押しつけては引きつけてアリーナを追い詰める。

「あふ……うう、はあ……ああ、あ——」

びくびくと小さくアリーナの身体が震えた。同時に結合部から精液混じりの愛液が押し出されてくる。
もう何度目になるかわからない軽い絶頂。

「う——あ、はあ——、あふ、はう、はっ、はあっ……あひ……うう……!」

「お嬢ちゃんもようやく男の味を覚えてきたみたいだなあ?」

「さすがに3時間 マワし続けたらそうなるだろ」

「いやあ このお嬢ちゃん 鍛えてるだけあってなかなかソツチの筋もいいぜ」

アリーナの下になっている男は自分からはほとんど動いていない。

アリーナの身体を前後左右にゆすって、最奥をこねり続けている。

遠慮することなくもう何度か射精はしている。精液でべとべとに汚れた子宮口に龟头を密着し続け、執拗にぐりぐりとひねりこんでいた。

「あううう……! うう、はあ、やあ、ああ……んう……!」

初めはかんばしくなかったアリーナの反応が、結合から二時間あまりに達する頃に劇的に変化した。

一度小さな絶頂を迎えてから、もう何度も達している。

うぶな娘の未発達な陰肉が男の執拗さによって急速に開発されたのだ。

(きもち……いい……ぜんぶ、流されてしまいうまくない……)

「お? 子宮口がさがってきたか……? クク……そうか、そんなに俺の精が欲しいか!」

「あ……は、へ……?」

アリーナはついに、無意識のうちに自分から腰を動かし始める。

一番奥の一番キモチイイところ——そこにもっと刺激が欲しくて男の上で身体をゆすった。

(あ、ああ……きもち、い……い)

「すっかり蕩けてやがるな……。自分が何してるのかわかっているのか?」

べちべちと頬を叩かれ、アリーナの目に理性が舞い戻る。

も…もういいでしょ！
おねがい…！！
はやくパデキアの…

はうツッ！

お嬢ちゃんも
ようやく男の味を
覚えてきた
みたいだなあ？

さすがに3時間
マワし続けたら
ほぐれてくるだろ

いやあ
このお嬢ちゃん
鍛えてるだけあって
なかなかソツチの
筋もいいぜ



「あ……」

「ほら、見てみる。自分から腰を動かしてるぞ？」

「あ……ああ、ちが、ちがうの……！！」

「これは、こんなの……ちがううう！！」

「何が違うんだ！ 口では言いながら

動きは止めてねえじゃねえか！

それにこの男を誘う動き……！！」

たまらずに男も動き始める。

がっしりとアリーナの腰を掴み、

下からドストスと乱暴に突き上げる。

「あ……！！ ああっ！！ あひ……、

んっ、ふあ、ああ！ やあ、イ……く……！！」

最初に突かれたときとは比べ物にならない快感と多幸感――。

アリーナの肉体は覚えてたての蜜の味をむさぼった。

「おらっ、イツちまえ……！！ 俺もまた……！！」

「ああっ、はあ、ああああ！

いああん！

イ、くううううううううツッ！！」

ルイーダ編 「慈悲」



急な訪問者。

いかにも商人という身なりのでつぷりと太った男。ルイーダの酒場に訪れた彼は、

それとなく人払いをするよう要求する。

「……これに何が書いてあるのか読めるかね？」

奥の部屋で二人きりになるやいなや、

男は懐から書類を取り出した。

「……」

いぶかしげにしながらルイーダは書類を見る。

そこにはセントシュタインの宿屋が

借金をもとに抵当に入っていることが記されていた。

「……86万……ゴールド……？」

とても現実とは思えない数字。

「な、なんですか、これは!？」

「何って、セントシュタインの先代の店主の借金だよ。

いやね、ワシも諦めていたんだが……」

久々にこの辺りにきてみれば、

元気に呼び込みなぞしてるじゃないか」

「……」

「さぞかし儲けているんだろう？」

返済してもらおうと思っただね。

宿屋の店主は小娘だったから、

オーナーだというあんたに話をつけにきたわけだ」

「で、でも……こんな大金！ それにこの借金は先代の……」

「先代も何も、宿屋自体が抵当に入っているわけだからね。返してもらえないなら宿屋を売りに出すしかない」

「そんなことをしたらリツカが！」

「そうだな。さぞ悲しむだろうね。最も、ワシも鬼じゃあない。借金を返すかわりに“なんでもする”と言われれば慈悲を見せたくもなる」意味ありげにゆっくりと語りつつ、男はルイータの身体にねっとりとした視線を浴びせる。

頭のとっぺんから脚のつまさきまで、値踏みするように見た。

「な、なんですか……？」

「君も酒場の女主人ならわかるだろう？ まあ、君がイヤだというなら……あの宿屋の小娘に同じことを言ってもいいわけだが」

「……ッ！」

(リツカにこんなことを知らせるわけにはいかない……)

うつむくルイータの胸に男は手を伸ばす。下からもちあげるようにして、その豊満な感触を楽しむ。

「くっ……」

「さあ、どうかね？ 話は単純だ。宿屋を売るか、それとも君が……あるいはあの小娘がワシの慈悲にすぎるか、そのどちらかじゃないか」

(何が慈悲よ……！)

足元を見る男のやり口に腹の底が煮えくりかえる。だが、やはりリツカに借金のことを知らせるわけにはいかない。

いや、まだ若く純真なリツカに、この男の存在すら知らせたくなかった。

「……条件は、なんですか……」

ルイータがしぶしぶ折れると、男は目の奥に好色と喜色を浮かべた。

「ワシはこれから一週間、セントシユタインのあの宿に泊まる。その間、君はワシの言うことをなんでも聞く。これでどうかね？」

「……一週間……ほんとに一週間だけ、ですね？」

「ああ、そうとも。きっちり一週間だ。何なら証書も作ろうじゃないか」

「……わかり……ました」

これくらい
してもらわんとな

舐めるだけじゃなく
ちゃんと
しゃぶりなさい

初日——。

「な、なんて格好を——」

呼び出されたルイータが部屋に入ると、

男はもう裸になってベッドに腰掛けていた。

「何、このほうが面倒があるまい。生娘でもないだろうに、

そんなに恥ずかしがることもないだろう」

男の言葉の裏には暗に“酒場の女主人”であるルイータを

曲解し侮蔑するような意味が込められている。

敏いルイータはそれに気づくが何も言わない。

反感を表したところでますます男を調子付かせるだけだからだ。

「まずはこれをしゃぶってもらおうか」

「……………わかりました」

内心の嫌悪や動揺を悟られないためもあってルイータは素直に従う。

感情を表面に出せばそれだけ男に付け入る隙を与えてしまう。

「う…………」

まだペニスは半勃ちの状態だがそれでもかなり大きく

黒く淫水焼けていた。

「どうかね、ワシのは？」

「…………ツ！」

何も答えずにまず手でゆっくりと愛撫し始める。

「ほほ、君の手はひやりとしていて心地良いな」

ルイータの手のなかでペニスは徐々に熱を帯びてきている。

「だが、ちゃんとワシの言うことを聞くんだ。

手でするのも結構だが、しゃぶれと言ったはずだぞ」

「…………はい…………」

ルイータはしぶしぶ舌を伸ばし、

龟头をおそろおそろといった風に舐めあげる。

「ン…………っ！」

まだ龟头に少し舌を這わせているだけなのに、

まるで男の精そのものを味わわされているかのようなだった。

「ふむ……少し控えめすぎるな」

男は勝手なことをつぶやき、ルイータの頭をつかむ。

少しリズムをつけつつ半ば無理矢理ルイータの頭を動かす。

「ん……ふふ、んっ、ちゅ……んむう！」

「これくらいしてもらわんな。」

舐めるだけじゃなく、ちゃんとしやぶりなさい」

「はむ……あふ、はあ、はあ……ん……」

苦しげに息をつくルイータの口内で、ペニスがむくむくと隆起する。

「んむ……はあ、む……ん、ちゅぶ……」

歯があたらないように気を配りながらルイータは必死で口を大きく開ける。

（こんなに大きくなるなんて！）

性臭もますます強くなりルイータの鼻腔を刺激する。

（においと圧迫感で……頭がヘンになりそう……）

こめかみから垂れた髪を耳にかけつつ奉仕を続ける。

「んむ……ちゅば、んぶ……ふう、はう……はあむ……んちゅぶ……ふあ……」

いつの間にかルイータの頬は紅潮し、目も少し潤み始めていた。

あこから自らの涎が垂れるのも構わずにペニスをしゃぶり続ける。

「はう……んふ、ふあ……ちゅぼ、ちゅぶ……ふぼ、ちゅ……」

男が放つ性臭で頭の芯が痺れている。

いつしか奉仕には熱がこもり、唇をすっぱりと亀頭にかぶせて雁首を刺激する。

「んく……ちゅぶ、はふ……ん、ふあ、あむ……はむ、じゅぶ、じゅぼ……」

「ふむ……なかなかうまいじゃないか」

「んふあ……はあ、あう……」

男が口を開いて一瞬だけ我に返る。

いつの間にか夢中になっていたことを自覚し、かっさ羞恥に身体が熱くなった。

だが——男にそれを悟らせないために、平然を装ってまた奉仕に戻る。

（……一週間……一週間だけなんだから、なんとかやり過ごせば……）

「はむ……んちゅ、ちゅぶ……ちゅぼ、んぶ、ちゅ……はむ、うう……く……」



（それにしても……なんてニオイと大ききなの……）
えぐみが強いはずの性臭によって何故か行為に没頭してしまう。
「はむ……ちゅぶ、ちゅぼ、じゅぼ……！」

自らの口内で男のものがびくびくと震えるたびに精のニオイを感じ、
頭と下腹の奥が甘く痺れてしまう。

「くお、おお……そろそろ出すぞ……」

「んふ、ちゅぶ……んふ、ふむううん!?」

男が自ら腰を揺らす。亀頭の先端がこつこつとルイータの喉を突いた。
「く……んぐ、む……はあ、はむ、ん……！」

「おおう!!」

「ふはっ!!」

口内でまた一際ペニスが大きくなると同時に、
脈動しながら唇の外へと抜けていく。

男はルイータをベッドに押し倒し

ペニスを握りしめながら覆いかぶさってきた。

「まずはそのキレイな顔に出させてもらおうか」

「……っ!!」

ルイータの眼前でペニスは大きく脈打ち 精の塊を吐き出す。

「あ……うあ、く……」

勢い良く噴き出した白濁がルイータの顔と髪にぱたぱたとかかった。

「ふう……なかなか良かったぞ」

男は満足げにうなずきながら萎えかけたペニスを

ルイータの頬に押し付けた。

そしてあろうことか、亀頭の先端に残った精液を

ルイータの髪で拭き取る。

「どうかね？ ワシの慈悲は」

「……っ!!」

「今日はこのくらいにしておこう。また明日頼むぞ」

「……はい」

口元に張り付いた精液を飲み下し、ルイータは頷いた。

ふむ……
もう三日目だと
いうのに
全く飽きがこんな

フフフ……
こんな場所でも
あそばされて……
キミも興奮して
いるのかな？

わざわざ
こんな場所で
しなくたって……!

次の日――。

セントシユタイン宿内の酒場は多くの客でにぎわっている。その喧騒から少しだけ離れたカウンター裏の酒蔵庫。そこでルイータと男が絡み合っていた。

「ふむ……。もう三日目だというのに全く飽きがこんな」
勝手なことを言いながらルイータの身体を弄ぶ男。

ゆっくりと乳房を後ろから持ち上げて、豊かな感触を堪能していた。

「ん……く……っ！」

（わざわざこんな場所ですなくたって……！）
他のどの感情よりも今は怒りが勝っていた。

要求してくる男にも従うしかない自分にも大きな怒りを感じる。

「く……はあ……、う……！」

（でも……今は耐えるしか……！）

十歩も歩いけばそこはカウンターで、リツカやロクサーヌもいるのだ。

「どうした？ 難しい顔をして？」

「……っ！」

男がからかうように言いながらルイータの首筋に舌を這わせる。

ぞくぞくとする嫌悪感が腹の奥底からあふれだす。

「う……はあ、はあ……」

男の性技はけして下手ではない。

遊び慣れた手つきでの確に愛撫してくる。

「ん？ どうしたのかね？ 頬が赤いようだが？」

「……！ い、いえ……」

「フフフ……こんな場所でもあそばされて……」

キミも興奮しているのかな？」

「そ……そんなことは……！ んんっ！」

焦らすような回りくどい口ふりとそれとよく似た手つき。

男は決まがつつくことなく丁寧に指を繰る。

「はあ……うう、く……！」

とことんまでまわりくどく。

胸の先端にはけして触れず、周囲を追い詰めるように触る。

「さて……そろそろ準備は整ったかね？」

「準備……？」

背後で衣擦れの音がする。ついでルイータの服がまくりあげられた。

「え、ちよつと、まさか……！？」

「さあ、ワシの慈悲をやろう」

まだ十分には濡れていない秘所に、男がペニスを押し付けた。

「あ——いやつ、まって——」

巧みな焦らし責めで濡れそぼっていた秘裂に無理矢理挿入してくる。

「い……や、痛……あ、う……ううううう……！」

「ふう。予想通り極上の蜜壺だな」

ぎちぎちと軋むような感覚の末に男のペニスがルイータの腔内に納まる。

「フッフ……随分きついようだが、相当久々なのか、それとも元々こうなのか。どちらにせよ、ワシの見込んだ通りの身体だ」

「や……ああ、だめ……！ダメ！ダメ！う、動かない……で……！」

「何がダメなのかね？」

みちみちと肉質の音が鳴る。男が腰を動かし始めたのだ。

「みんなにバレるのがダメなのかな？それとも気持ちよすぎてダメなのかな？」

「はあうッ！」

「締め付けるだけでなく、絡み付いてくるようでもある。実に素晴らしい」

「あ……は、う……ああああッ！」

奥を突かれて思わず声があがってしまう。

「う……はう、うう……！」

あわてて自ら口を塞いだ。

（聞こえてない……わよね？）

耳を澄ますと酒場の喧騒のなかで元気よく客に応えるリツカの澄んだ声が聞こえる。

どうやらルイータの声は聞こえてはいないようだった。

（よ、よかった——）

「あうううッ！」

「ちゃんとこつちに集中してもらわないと困るよ」

男は力強くルイータを突きまくり、胎内をえぐる。

や……ああ
だめ……!!
ダメ!ダメ!

う……動かない
……で……!!

何が
ダメなのかね?

みんなにバレるのが
ダメなのかね?

それとも
気持ちよすぎて
ダメなのかね?

「あ……はあ、うぐ……くう……! はっ、はあ……!」

腔内でペニスはますます大きくなっている。

だがそれ以上にルイータの愛液が分泌されていて、

入れたときほどの圧迫感はなくなっていた。

「うぐ……ふう、ふうう……はう……!」

ストロークはスムーズになり、

パンパンと尻と腰がぶつかる音が響く。

(うう……ダメ、このままだと……!)

自らの下腹の奥底から何とも言いようのない高揚感が

這い上がってくる。

この状況でそんな感覚を抱いてしまう自分が惨めだった。

「ああ……は……あ、くうう……!!」

「……この辺にしておくか」

ルイータが気を遣りそうになったところで男は肉棒を抜いた。

一気に訪れた喪失感に腰が抜けそうになる。

「え……?」

思わず後ろを振り返ったルイータを男は

ニタニタと笑いながら興味深げに見つめた。

(どうして……こんなタイミングで!?)

様々な疑問がルイータの頭を過ぎる。

だが男は“また明日頼む”と軽く声をかけ、

酒蔵から立ち去っていった……。

ダメ……声を
だしたら……！

……！！

ヤッー

はっー

フフフ…
カラダがビクビク
してきているのが
伝わってくるよ

いいんじゃないか
ここでなら
声を出しても…

ビクッ

ビクッ

またその次の日。

今度はルイーダの酒場の地下にある水浴び場。

「う……は、あ……うあ……」

もう既にルイーダの押し殺した、だが艶のある声が響く。

地下は貸切状態にしているとはいえ、

上階はいつも通り客でにぎわっていた。

万が一にも聞こえはしないか――。

そんな想いがルイーダの胸を締め付ける。

「君は濡れにくい体質のようだが……これはこれで趣があるな」

「あ、あなたが……もう少し上手ならいいんですけどね」

「ふふ……君からは何故か貞操感を強く感じるな。」

もつとも、それを汚すことがワシの楽しみなわけだが」

(勝手なことを言っ……！)

男の指が蠢き、ルイーダの陰唇に指を這わせる。

年の割りには固く閉じているそれをもてあそび、徐々に開かせていく。

「うう……く……」

その程度の感触ならすぐったいばかりで快感はほとんど無い。

だがこの男に弄ばれているという自覚がルイーダをさいなんだ。

おまけに――背中に感じるでっふりとした腹の感触と生暖かい体温。

ルイーダのスレンダーな肢体はその肉の布団のなか

にすっぽりと包まれてしまっている。

(いや……体温がまとわりついてくるみたいで……)

こうして後ろから愛撫されているうちに

お互いの皮膚の境界線がわからなくなる。

それはなんとも不快な感覚だった。

「ああああっ！」

突然頭のなかに白い火花が散り、大きな声をあげてしまう。

一瞬何が起こったかわからない。だがその後、続くジンジンとした痺れがクリトリスを刺激されたことを伝えていた。

「あ、ひあ、うあ……ああああっ！」

ピン、ピンと男の指がクリトリスを弾く。

(ダメ……声、だしたら……！)

「うぐ……はぐ、ぐ……ううう、あ、う、うう……！！！」

なんとか耐えるが、その耐えるという行為によってまた性感が高まっていく。

「さて、さすがにそろそろ良い頃合か。どれ、ワシの慈悲をやるうじやないか」

「え——そんな、まって——、ああ、ああああっ！」

男の挿入はいつも突然で有無を言わせないもの。昨日もそうだったが、それが犯されているという感覚を強くする。

(うあ……あ、はいつて……くるう！)

十分には濡れていないルイードの中をみちみちとこじ開けて無理矢理に挿入していく。

「あぐ……は、ああ……くあ、うう……！！！」

だが今回は昨日とは少し違っていた。

慣れなのかそれとも防衛反応なのか——肉棒が取まりきる前に愛液があふれだし、挿入をスムーズにする。

「あうう！？」

そのせいで半ばから男のペニスは一気呵成に最奥へと突きこまれる。

「うう……は——あう……んふ、はあ……」

「ふむ。相変わらず良い反応をするな。調教次第で極上の娼婦にもなれるが……まあ、ここは一週間という契約だ。楽しむとしよう」

「うく……はあ、うう……！！！」

(ちよ、調教！？ こいつ、人をそんな、馬か何かみたい……！)

女として最大級の侮蔑をされた——その自覚で怒りを燃やすが、感情の高ぶりは性感の高まりによってすぐに掻き消える。

「あはあっ！ はあ、あうう！」

愛液が分泌されて膣内がぬめっているのが自分でもわかった。
自らの身体が男を受け容れているようで嫌になる。

「ここがいいんだらう？」

「!?!? あひいん!?!」

さつきから我慢しているはずの声がどんどん漏れてしまう。

男はルイータの膣袋のある箇所から自らの雁首を押し付けて擦っている。

「やはりな。君のような貞操観念の強い女ほど、膣内で感じるものだ」

「うぐ……はう、うう……や、ああああ……!?!」

昨日感じた、下腹の奥の熱。それが蘇ってきてルイータの胎内でとぐろを巻く。

(ああ……熱い、からだか……のども、からから……)

全身の皮膚が総毛立ち、表面がちりちりとこけていくかのよう。頭のなかでは白い火花が散る。

「はあ、はあ、ああ——ん、んふあ、ああ、い……あ、はあ、ああああん！」

胎内でとぐろを巻いている熱がいままさに解放されようというときに——。



ふむ
相変わらず
良い反応をするな

はぁッ
調教次第で
極上の娼婦にも
なれるが……

まあ
ここは一週間という
契約だ

あッ
純粹に
楽しむとしよう

「あ——ふあ、う……？」
また男がペニスを抜いた。
(え……そ、そんな……!?)
「ククク……。今日の慈悲はここまでだ」
胸をいっばいにしかけた恍惚が一気に切なさへと変わり、
大きな喪失感が訪れる。
ルイーダは目を潤ませながら放心する——。

ついに最終日——。安堵を感じるはずなのに、ルイータの胸には暗くくすぶるような感情がある。まだかろうじて自分のなかに“一線”は踏み越えていない。少なくともそのつもりではいる。

だがこの一週間で男に身体を思う存分に蹂躪され、今まで知らなかった自分の一面に気付かされてしまったような感覚があった。

(調教……)

男がいつか言った台詞がいつまでも耳の奥にこびりついている。

陰湿で、だがどこか甘美な響きを伴って——。ルイータの視界が闇に包まれた。

最終日なんだから、男の言うことに素直に従ってさっさと帰ってもらおう——。

そんな風に言い訳ともれぬ理由を自分のなかでこじつける。

(でも……これは……)

いざ実際に闇のなかに放りだされると一気に不安感と後悔が大きくなった。

男が何をしても、何をしようとしてもわからないのだ。

「どうかね？ 目隠しの感想は」

「……ッ」

何も応えることができずルイータは唇を噛んだ。

この暗闇のなか、響いてくる男の声に嫌意外の感情を初めて覚えてしまったのだ。

声と気配がそばにあることの安堵。人間の本能がルイータのかたくなな心をわずかにこじ開ける。

目の感覚を遮断され、より強く男の性臭を感じた。

これから行為が進むにつれてますます強くなっていくのだろう——そう考えると何故かぞくぞくとした怖気が走る。

「あ……」

さまざまな考えが過ぎるルイータの頭の中に、大きな感覚が突如あらわれた。男が胸を触っているのがわかる。

(あ……あたたかい……)

「はあ……はあ……」

(そういえば……部屋がちよつと寒いような……)

ルイータの頬は急速に紅潮してきている。肌を感じる寒さと何も見えないことへの不安。

その両方によって、ルイータは男のほうへと少し身を寄せていた。男はそれを見て笑い、嬉しそうに目を細める。

「うう……はう……はあ、ふう……」

男はルイータの頬に口付け、そのまま耳に舌を這わせた。

「ん……っ！」

独特のぬろりとした感覚。

(きもちわるい……！)

しかしそう思いつつもルイータの頬はますます紅潮し、目隠しの下では瞳が潤み始めていた。

この一週間で君のカラダはどう変わったかな……？

どうかな？

今……ワシに触られて

君のカラダは

どうなっているかな？

んっ……

おあ

おあ

すべて言うことを聞く契約だろうか？

答えなさいどうなっているのかな？

……か……感じて……います……

はあ！！

「この一週間で君のカラダはどう変わったかな……？」
意味ありげに笑いながら、男はルイータの股間に指を這わせる。

「んふ……ああ……！」

未だ控えめではある。だがそこはしっかりと湿り気を帯びていた。まだ濡れやすいというほどではないが、

男に初めて接した当初と比べれば愛液の分泌量は確実に増えていた。にちゃ、ぬちゅ——。

卑猥な水音が上がるとルイータの身体は震えた。

（私……こんなに濡れて……）

事実によって胸を強く締め付けられる。

「どうかな？今……ワシに触られて君のカラダはどうなっているかな？」

「……んっ……か……感じて……います……ふあッ！」

青く未熟な性感は男によって急速に開発されたのだ。

「あふ……はあ、はあ……！」

自分が濡れている。感じている。

男の存在もだが、その事実もルイータを追い詰めて高めていく。

男が少しルイータの身体を抱き寄せた。

それに素直に従って体重を預ける。

「んふ……んく……ふあ……！」

目隠しされながら鼻を鳴らし、男の匂いを鼻腔いっぱい吸い込む。

その姿は男に満足感と確信を与えるものだった。

もう男がどこを触ってもルイータの身体は初々しい反応を返す。

だが、男は用意周到で慎重で疑り深い。

心の奥底に蛇のような心性を宿している。

すっかり素直になったルイータをベッドに寝かせ、

あらかじめ用意してあった器具で拘束していく——。

「ふふ……良い格好になったな」

ルイーダは完全にベッドに拘束されている。

「はあ……はあ……！」

しかも胸には媚薬を塗った湿布を貼られ、股間には同じ薬を塗った張り型を挿入された。

「素直な女は良い女だ……。それが美しい女なら尚更だな。だが、まだ本当の意味でワシの慈悲をやるわけにはいかん」

男はもつたいをつけていいながらゆっくりとルイーダの周囲を歩き回る。

霞がかかったようなぼんやりとした思考のなかで、ルイーダは必死に男の匂いを探していた。

「あふ……く……はあ、はあ……うう……」

「失って初めてわかることもあつてな……ククク……」

最後の仕上げへの準備が整い、男はようやく会心の笑みを漏らした。

「契約は今晚で満了だ。約束通り借金は帳消しにしよう。ここまで素直にワシの言いなりになってくれた君に免じてな」

「はあ、あふ……うう……！」

（そ、そうだ……わたし、借金のカタにこんなことして……そうだった、これで終わり……終わるんだわ……）

だがルイーダの胸のうちに安堵は訪れない。あるのは切なさや寂寥感——。

そしてこれから始まることへの予感を伴った、途方も無く大きな不安感だった。

「ではまた明日の朝会おう」

「え……?!」

足音が遠ざかっていき、扉が開く音がする。

——バタン。そして閉じる音。突如として訪れる静寂。

（そ、そんな……!）

真つ暗闇のなか、あわてて男の気配を探す。だがあるのは性臭の残り香だけだった。

（まさか、本当に……?）

しん、とした室内。何も聞こえてこない。

「だ、誰か——」

いや、呼ぶわけにはいかなかった。あの男以外の人間がこの格好を見たら——。戻ってくるのを待つほかないのだ。

（明日の、朝……?）



ルイータの胸に絶望が降りてくる。

こんな状態で明日の朝まで。とても耐えられない。
心が弱きへと流れると同時に、今度は性感が高まり始める。

「え……………」

湿布を貼られているところがじりじりと焼かれるようだった。

（なに、これえ……………!?!）

腔内の張り型からも同じようにやけつくような感触が湧き上がる。

（熱い……………熱い……………!）

かゆみは何重にも重なって膨れ上がればこんな熱さになるだろうか。
今更になって、心理状態と相乗する形で効果を発揮し始めた媚薬。

「あく……………はあ、はあ……………あうう……………ああ……………っ……………!」

ルイータは身もたえするがそれが限界だった。

拘束されていては自分で自分を慰めることしかできないのだ。

「誰……………か……………ああ……………だめえ……………うう……………!」

声を必死に押し隠しながら、

だがそれでも自分以外の存在を望んでしまう。

この熱さとかゆみを解消してくれる誰かを——。

「うう……………うぐつ、はあ、あぎ……………うう……………うううつ!」

耐えなければいけない。明日の朝まで。

（明日の朝……………まで……………）

耐えられるわけがない。

「いやあ……………だめ……………こんなの、はあ、は——ああ……………!」

わずかにしか自由にならない身体を精一杯動かして身悶える。

肌に食い込む縄の感触すら心地良かった。

「うぐ……………はあ、はあ……………ああ……………!」

唇の端からは涎がたれ、目隠しの下では涙があふれた。

「あそこが……………ああ、あつい……………こんなの、わたし、壊れ……………ああ!」

張り型を強く強く締め付ける。

だが男のものではないそれは、

ルイータの欲求を根本的に解消することはなかった……………。

翌朝。男がゆっくりと歩みを進め、部屋に戻ってくる。

「ああ……はあ、うう……」

中ではまだルイータが身悶えていた。男が戻ってきたのにも気付かず、自らの感覚の海のなかで溺れている。

「これで契約は完了したな」

余裕たつぷりに男が声をかけるとルイータの動きが一瞬止まった。唇をきゅっと引き結び、ひたすら何かに耐えるような表情。

男は心中で会心の笑みを浮かべながらルイータの目隠しを外す。

「あ……ああ……」

その下からあらわれたのは、男に脅え、また同時にすがりつくかのような隷属的な視線だった。

「この一週間、よく耐えたな」

酷く優しく男が声をかける。するとルイータの瞳にわずかだが欢喜の色が入り混じった。憎い男に褒められて嬉しい——そんな倒錯した感情。

ルイータの心は肉へのあまりの刺激によって半分壊れかけていた。

「おやおや、もう契約は終わりだということにこれはどういうことだろうか？」

ずぬ、ぬちゅ、にちやあ——。

「あひいん——」

男が張り型を抜いてやると、ルイータの秘所からどくどくと塊になった愛液があふれでる。

おまけに膣口は何かを求めるように収縮し、ひくひくと震えている。

「全く、はしたない……」

ため息をつきながら男は立ち上がる。部屋のカーテンを少し開けた。太陽の光が差し込んでルイータの姿を照らし出す。

表情は疲労と法悦に蕩けている。身体にはしっとり汗の膜が張り付いていて、てらてらと光った。

おまけに股間からはずっと愛液を垂れ流して——。

「あは……ふあ、はあ……」

唇も膣口も開ききつていてうまく閉じることができない。

「さて、どうしたものか……。もう取捨がつかないように見えるな……。致し方ない契ここからは契約とは関係ないが」

「どうしてもワシの慈悲が欲しいというのならくられてやらんでもない」

「あ……ああ……」

慈悲。ルイータの胸にその言葉が烙印のように焼き付く。同時にこれまでその慈悲で与えられた感触を思い出す。

「く……ください……」

「ちゃんとお願いなさい」

「ああ……お願いします……あなたの慈悲を……私にも分け与えてください……」

「どこにだね？」

「私の……私のおま○こに、くださいい！」

全てを忘れてルイータは叫んだ。

さて……
どうしたものか……

もう取捨が
つかないように
見えるな……

どうしても

ワシの慈悲が

欲しいというのなら
くられてやらんでもない

どうかな？



男はその言葉を聞くや、がっしりとルイータを組み敷く。ぐちゃぐちゃに濡れている秘所に乱暴にペニスを突きこんだ。「ああ……あああああああ……！」

まだ静かな早朝だというのにルイータは大声をあげる。

「いい……きもち、いい……！！ ああああああああ！！」

「ククク……そんなにワシの慈悲が欲しかったか……！！」

「はいいい！ 欲しかった、です……！！」

ああ、きもち、い……ふあああああ……！！

挿入と同時に一気に高まった性感が弾ける。

男の動きに合わせて自らの腰を大きく動かして応える。

「ああ……う……ひう！ あひ、あああああ……！」

ずつと下腹で渦巻いていた熱が一気に解放されていく。

それに伴って全身にびりびりと電流が走り、全てを洗い流す。

（きもちいい……よすぎるう！）

男の胸に顔を埋め、一晩ぶりの濃い性臭をかいた。

それだけで全身が喜びに打ち震える。

じゅぶ、じゅぶ、ずぬ、じゅぶぶ……！！

どンドン溢れ出す愛液が

信じられないほど大きな水音となって鳴り響いた。

「ああ……はあ、あ——は、ああ、もうだめえええええ……！」

「く……縮まりよる……！」

絶えず大きな絶頂が訪れていて、

ルイータの膣内は全くゆるむことがなかった。

肉棒をがっしりと食い締めて離さず最後のときを待っている。

「はあ、あふ、ふく……ふあ、はあ……！！」

男の高ぶりを感じ、ルイータは無意識のうちに

腰に脚を巻きつけた。

男のものを全て受け容れ、受精する体勢になる。

「くく……よくわかってるな！ さあ、そろそろ出すぞ……！」
「は、はい……！」

「ワシの慈悲でお前の腔内を満たしてやろう……！」
どぐ、どぐ、どびゆる、びゅぐ……！」

「あ——は、あ——う、ひ、うう……あ、アアアアあああああああああああ——」
びゅく、びゅぶ、ぶぶ——。

熱い白濁で子宮内を汚されながらルイータは果てた。脚は男の腰をがっしりと食い締めて離さない。

「ああ……はあ、あふ……うう、あああああ……」

男の体重と体温を全身で感じていることが何よりの幸せだった。

もちろん、腔内に取まって未だちよろちよると白濁を吐き出している肉茎の熱と脈動を感じることも。

「うう……ふあ、はあ……、はあ……！」

朝日を浴びつつもルイータは何ら気にすることなく自ら腰を動かし始める。

「ん？ どうした？」

「まだ……まだ、足りません……。 もっと、もっとお慈悲を……」

「フフフ……仕方のないやつだ」

男も腰の動きを再開する。

ぬちゅ、じゅぶ、ぐちゅぶ——。

子宮内に取まりきらなかった白濁が結合部から溢れ出し、ルイータの尻や太股を伝った。

だがそんなことには全く構わず、ひたすらに男を求めて腰を振る。

「ああ……きもち、いい……」

蕩けたその瞳の色は、酒場の気丈な女主人のものとはもう別物だった……。





あああッ!!

ぐぐぐ

ぐぐぐ



今回はすべて声が出せないような状況で責められる系のお話に特化してみました。

陵辱要素よりも羞恥要素重視ということで
いつもみたいに悪役や雑兵に集団でやられるモノではなく
攻めキャラクターをあえて勇者にしてみたりしました。
親しいものに責められることで逆に恥ずかしさが増す感じにしてみました。

ちなみにピアンカを攻めている男も実は主人公（リュカ）です。
そういうプレイです。
終わったあと「も〜！リュカのバカバカ！」みたいにになります。

4の勇者の名前は「ユーリル」という説もありますが
今回はドラゴンクエストモンスターバトルロードでの
オフィシャルネームである「ソロ」のほうを
採用しました。

アリーナのお話だけちょっとかわいそうだったかなと思います。

2009年 11月26日発行

完全攻略D フルカラー同人誌版

発行 / クリムゾン <http://www.alles.or.jp/~uir>

印刷 / 大陽出版株式会社



力は封じられた。視覚を封じられた。城の兵士に寝室であまりに巧みな性戯に乱され...

へへ... 遠慮することはないんだぜ... もっともっと濡らせよな

う... そんな...

それに... もう王妃さまが感じてらっしゃるのはバレバレですよ

そろそろ快楽を二人で

パデキアのねっこと引き換えに、ならずものたちに辱められるアリーナ。クリフトが寝ている部屋の隣で縄で四肢を縛られて何時間も...



仲間が馬車の外で戦っている最中に、チャゴス王子の慰みモノになってしまうセシカ。情けない男に何の抵抗もできずに...

まだ時間がかかるはずだ。みんなが戻ってくるまで。もう一回イカせてやろう。

頭の中へ... ちぎって...



宿屋の借金のせいで、金を弄ばれることになったルイータ。体酒蔵や浴場... いう他の人が来られるかもしれないような場所でねちっこく責められたり、異物を挿入されたままベッドに縛り付けて一晩中放置されたり...

何がダメなのかね?

う... 動かないで...

みんなダメな



夜、宿屋で勇者に襲われるマーニヤ。隣で寝ている妹に気づかれないように、いきそうになりながらもあえぎ声を押し殺すが...

おねが... そんな音... たてたら...



戦いでミスをしたおしおきとして、透明になった勇者に街の中でいたずらをされてまくる女賢者。股間を舐められてイクところを子供に見られて...

勇者さ味方... 触られてる...

そんな... こんな街の真ん中で... 一番恥ずかしい... トロロを...

● 18歳未満のかたは購入できません
japanese sele only